

11月



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
11月号
No.605

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





出合い花 (2)

表紙の花▽ 仙溪

先月号で2本だけでいける「出合い花」をいけてみよう!と書いたが、是非みなさんもいけてみてもらいたい。

あまり考えすぎず、直感をたよりにして手にした花をいけてみる。

花材にもよるが、普段の稽古用の器ではなくて、いつもはそのまま棚に飾っているような小ぶりの器に、小さめにいけてみてほしい。はじめから小さくいけるのは勇気がいるけれど、小さくしてこそ生かせることもある。

黄金色の薄の穂に、鉢植から切った秋明菊を添えて、小さな口の丸い器にいけた。この器の胸はえくぼのようにへこんでいる。

お月様へのお供えのイメージ。

花材 薄の穂(穂科)

秋明菊(金鳳花科)

花器 陶壺

喜樹 ^2頁の花▽ 櫻子

数十年ぶり蔵や花器置場を整理して久しく使っていない花器が沢山出て来た。9月号のテキストから順番に花をいけている。

この三彩の壺は祖父も母も好んで使っていた記憶があるが、いけにくいのか、いつも奥に仕舞われてしまっただけで出てこない。剣山も入らないくらい口が小さいのに水盤のように浅く平たい。大きな枝のかんれんぼくをいけるのは難しかった。



た。しかしいけ終えてみると、二種の枝ものと大輪の薔薇に負けない強い壺だなと感じる。口が小さくても少しだけ花をいけて満足する性分ではないので困るところだが。

中国原産のカンレンボクは秋になるとミニバナナをつけたような球形の集合果となる。

果実、根、茎葉に抗癌効果があり、葉用とされてきた。それで英名は *canseer tree* とか *happy tree* というのだ。中国では実の形から子孫繁栄を表す喜びの木ということで喜樹と呼ばれている。意味は違っても希望を与えてくれる木であったのだと思う。

花材 早蓮木(沼水木科)

丸葉の木(満作科)

薔薇(薔薇科)

花器 陶扁平壺

トゲのない薔薇

△3頁の花▽ 櫻子

今年の鈴薔薇の実(野薔薇の実よりも早く出回ったので、花会やお稽古に何度もいけさせてもらえた。野生の薔薇の実なのに年々棘が減って、扱いやすくなってくるのは有り難い事。

木苺は同じバラ科の植物。鈴薔薇の葉は取られているので必ず艶やかな緑を添えたい。ネリネの花も茎も瑞々しさを与えてくれる。

花材 鈴薔薇の実(薔薇科)

木苺(薔薇科)

ネリネ(彼岸花科)

花器 あげび籠



アブラドウダンの立花

仙溪

この立花の真と請に使った枝は、ここ数年、アブラドウダンの名目前で出回るようになったもので、葉の表面に微かな光沢があり、互生する葉は枝先に集まるので輪生しているように見える。細い枝であるが、水揚げがよく、色づいた葉は二週間たった今も元気である。

夏頃の稽古でいけた時には花が咲いていたが、ドウダンツツジの花には似ていない。

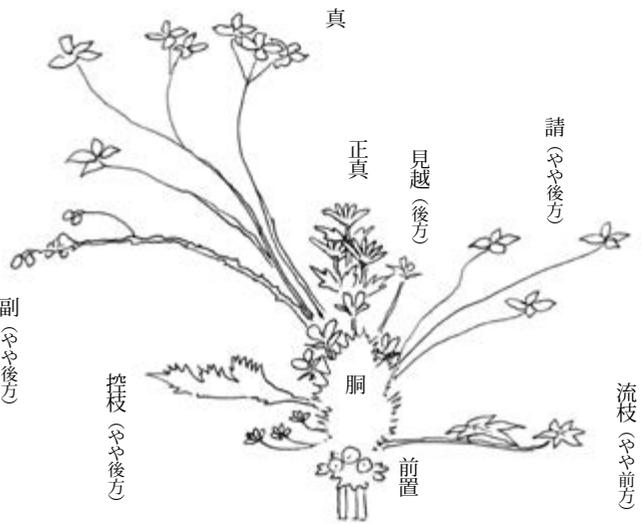


バイカツツジの花
参考 (<http://blog.livedoor.jp/tada170302/archives/5701634.html>)

調べてみると、これはバイカツツジであるらしい。バイカツツジがアブラドウダンの名前で流通しているようである。

バイカツツジは躑躅科・躑躅属の落葉低木で（ドウダンツツジは灯台躑躅属）、山地の林縁に生育する。水揚げがよく、葉に油を塗ったような照りがあるので、花材となったのだろう。きつとこれから花材として定着すると思う。

細枝は慎重に撓めないと折れてしまっているので注意したい。



流枝(やや前方)

請(やや後方)

見越(後方)

正真

胴

前置

控枝(やや後方)

副(やや後方)

流祖の時代より

近松門左衛門

「聖徳太子繪傳記」

近松門左衛門は、江戸時代に上方(京都・大坂)で活躍した人形浄瑠璃の作者である。承応二年(一六五三年)から享保九年(一七二四年)までの七十二年の生涯で、百作以上の浄瑠璃を執筆し、歌舞伎にも作品を残している。

浄瑠璃の一つに「聖徳太子繪傳記」というのがあり、その中に立花が出

用明天皇の皇子として生まれた聖徳太子は仏法に帰依し、排斥派の物部守屋の母が仏法をのしつた時不思議を見せ、改心させる。母は自害して守屋を仏法に入るように勧めるが、守屋は拒絶して反逆し、太子方と争う。帝や北の方を奪い幽閉などした守屋を、太子は河内国稲村城に攻めて、これを滅ぼす。(以上、廣田隼夫氏のHP「近松門左衛門」で「ごさーい」より転載)

さて、立花のくだりは、物部守屋の母が、息子の守屋に自分の仏法への改心を受け入れさせる方法として、聖徳太子から「毎月六齋日、草木の花を瓶に活け、諸天に祭り供養せよ、凡そ立花の功德には、草木成仏の因縁花散り葉落るにも聲聞無常の悟あり、粧ひ立て色々に咲き匂ふ花を見る時は、濁る心も清やかに怒りなく恨みなく天人の歓楽花にあり、いかに放逸の守屋も花には心やはらぐべし、その時出家の姿を見せ、仏道に誘引せよ」と教えられ、はたして守屋は立花の会のようなものを催すこととなるのだが……。

ここでの立花の描写を抜き出し、ここに書き写してみる。

あしの心、柳の副、前置に寒菊
正眞の鶏頭に少し色を持たせてし
やれ、木の取合せ、
南天の心、正眞のしをん、りん
どうのあしらひ、胴にいぶきのう
つりのよき、

松の心、正眞の燕子花、枇杷の
葉をつかふたり、控の柏梅戻の受
見越の檜葉
青葉まじりの紅葉の心、なかし
控の取合、正眞の菊、どれもどれ
もよう出来たとほめ嘸す、
そして「眞の立花」と題して次の
ような描写をしている。

是々御覽せ、是ぞ此神に向向の
眞の花の数、ゆがます直なる心の

竹を立初る一二の枝の房やかに、
茂る葉がさね呉竹の世々を重ねる
例也、正眞は水仙に、陰と陽と
のつがひ葉は、ここに口傳と岩戸
を表し、めぐみの露を貝口にうけ
て、諸願も成就の神、影向の枝と
かや受そへは、残んの菊籬のもと
に手折りて、ゆうゆうとして南山
を見しは唐土日の本の、朝日の
てり葉、はまきして、君がため鐵
しつはりと挽める露に戀をもつ
しぐれも霜も降らば降れ、ながし
の松は深緑、じつと控の若緑、見
せばや鶴も我宿と、千代に八千代
に昔衣、哀れの枯木を胴つくり、
雪を出たる早咲の梅こそ谷のうつ
りにて、水際さまよき花の影、何に
譬へん唐絵の屏風よ、なぜなせた
てて見たれば面白や、木立枝ふり
つりもよく、峰を見こしの松の葉
に月をも宿す景色あり、木々も草
葉も縁切れず、夫婦の縁も結び合
ひ、長うそへとや副下にまくらか
り葉のしやがはねよげのあいしら
ひ、おなじ青葉も濃き薄き、わけ
て浅黄と紺こんるりの葉がくれ
に、珊瑚の玉をもち上ぐる、おも
とは三がのまへおきに、口傳ある
ぞとしら玉椿、八千秋を祝ひこめ
野菊淨菊さし混ぜて左草とめ右木
とめ、雨露のそめ葉の芳しく、造
花の手業仇ならず、おのづからな
る風情には、見あぐる山の陰繁み
見おろす谷の奥深く、浅澤小野の
水わけて、千代を見せたる竹の節、

非常も心あり顔に、さしかこひた
る立花の作意、天も納受人樂みよ
うえん風流のもてあそび、月花わ
かぬもの迄も、あつと感じて認め
けり、

なんと素晴らしい描写だろう。少
し意味のわかりかねるところもある
が、立花に対して造詣が深くないと
描けない文章である。聖徳太子の時
代はまだ立花は生まれていないはず
なので、近松の創作として歴史の中
に立花を道具として組み込んだもの
と思われるが、それにしてもこの詳
しさはどうだろう。

流祖、富春軒仙溪の「立花時勢粧」
が世に出た貞享五年(一六八八年)
には、近松三十五歳。同じ京都の地
で仙溪も近松も過ごしていたこと
なる。

その頃、立花の会が競うように催
されて、その評判を反映して近松は
立花を話に組み込んだのだと思ふ。
「立花時勢粧」もおそらく参考にし
たのではないだろうか。

人形浄瑠璃の演目に立花について
見事な言い回しがあれば、観客も
立花にさらに興味を持ったに違いな
い。立花の功德を聖徳太子に語らせ
ているところにも注目したい。

参考





ビッグイシュー 日本版

「生き残りのしくみ」⑥

1951年、千葉県にある落台遺跡（縄文時代の船だまりと推測される）からハスの花托が出土し、植物学者の大賀一郎博士によってハスのタネの発掘調査が行われ、地下6mの泥炭層からハスのタネ3個が見つかった。

二千年前の弥生時代のハスのタネは、その年発芽して、翌年には美しい桃色の花を咲かせた。

植物の生命力の強さに脱帽である。

先月につづいて「ビッグイシュー 日本版21号」より、生物学者田中修氏による植物のあれこれを紹介する。最終回。

命を次代につなぐ多様な工夫

二千年の眠りから目覚めた「大賀ハス」のほかにも、ツタンカーメンの墓から発掘されたと言われる「エンドウマメ」。弥生時代の遺跡で見つかったとされる「古代コブシ」。室町時代の遺跡から見つかった「ツバキ」や「シラカシ」などが息を吹き返している。植物の人生計画は無限のようにも思える。

「タネは発芽にもものすごく用心深いんです。発芽には、温度・水・酸素の3条件が揃わないとダメだけれど、それに加えて70パーセント以上

のタネの発芽には光も必要。太陽の光の中でも光合成がしやすい赤色の光が当たるのを、ちゃんと感じてから発芽します。タネは慎重に、すごい能力を背負いながら命をつないできたんです。」

タネ以外にも植物は工夫をしている。「交配するために虫に来てもらうには、密や香りをつくるコストがかかります。いざというときにも子孫を残せるよう、保険をかけるように進化したのが『自家受精』できる植物です。例えばヌスミレには花が開かない蕾があつて、中ではいつのまにかタネがいついばいでできている。私たちが食べているお米や麦、大豆もそうした自家受精の性質を利用して品種改良したから、籾や莢ができる」と空っぽということがないんです。」

ほかにも熱帯地方のマザー・リーフは、葉っぱの縁にあるギザギザから根や芽を生やし、『ハカラメ』とも呼ばれています。」

植物にとつて一番安心な生き方とも言えるのが、地下茎をもつこと。ヒルガオ、ワラビ、タケノコなど。「土の中に潜っていたら温度もそんなに変動しないし、地上で芽を出してうまいこと育つことができればそれでいい。」

「最近ツクシが少なくなってきた。ビルや道路の建設で土を掘り起こしてしまうからです。土ごと掘り起こされてしまったら、地下茎を生やしているでも生きていけません。」

植物は約4億年前から陸上にいて、人間が現れたのはたかだか何十〇百万年前。それなのに地球を自分たちの土地みたいにしていないか。私たちはここで箸を置き、目の前のニンジンやキャベツにも感謝の気持ちをつたえるべきかもしれない。

「植物は、水と二酸化炭素と太陽の光で、自分たちの食べ物やちゃんとして。動物は食べ物や配偶者を探してうるうる動き回れるけど、もし植物が動いて、本気で逃げ回つたら、。私たち動物はいきていけないだろうねえ。」

おわり



レモンちゃんは手足の先が白い。畳の上を歩いていても、白足袋をはいているみたいで、上品に見える。花をいけていると、ときどき手元を覗きに来る。「レモンちゃんに指導してもらってるように見える」と櫻子がいう。たしかに庭の草木には造詣が深いかもしれないね。



檜扇 寒菊

仙溪

万葉集に「ぬばたま」の名前で詠まれている檜扇の実は、夏の終わり頃に緑色の莢がふくらみ、秋には茶色くなって割れると中から漆黒の種子が顔を出す。

今年はずらしく葉株ごと売られていたので、寒菊をとり合わせて、生花でいけてみた。



数日後に寒菊をはずして、胴の檜扇を留に使い、副の檜扇は花茎を撓めて副流しの動きのある花型にいかかえてみた。

少し大きい感じはするが、これから先、葉株で檜扇の実をいける機会が増えてほしいものである。





浜辺葡萄

櫻子

写真の団扇のような丸い葉はシーグレイプ。アメリカのフロリダ州南部から西インド諸島、南アメリカに分布する常緑小高木。海岸や砂丘に生えるので、和名をハマベドウという。芳香のある小さな白い花を咲かせ、葡萄に似た果実は濃赤色に熟し食用になるそうだ。

昔からこの葉はよくいけられてきた。祖父も両親もシーグレイプがあると目の色が変わっていた。

特に紅葉が綺麗で大きな木のままで鮮やかな色の花と取り合わせてきたのを覚えている。珍しくて固い丸葉だが、向きを工夫すれば花器と花との接点を上手く繋げて強くまとまる。

いけばなは何でもよいから足元を緑で隠してという発想にならないようにしたいと思う。安易に花器の口元に突っ込まれた葉を見てそう思う。とても大切な場所なのにと。

アンズリウムもピンクッションもありきたりな花で、すでに珍しいものではない。でも取り合わせや器や敷板でとても良い花となる。私にとっては良いか悪いかどちらかしかない花なので、よほど良い花に出会った時しか取り合わせしない。そんな想いもあって良いかな。

花材 アンズリウム(里芋科)

ピンクッション(ヤマモガ

シ科)

シーグレイプ(蓼科)

花器 金属花器



独楽こまのような器 仙溪

花器棚の奥から、巨大な独楽がくるくると回転しているような器がでてきた。棚からぼた餅ではなく、瓢箪から駒でもなく、棚の奥から独楽である。いや、独楽のような器だ。持とうとすると、腰が抜けそうに重い。底は小さいけれど、水をいっぱいに入れると、かなり安定のいい器である。

ちようどこの器がでてきた時に、花屋でアダンの実を見つけた。アダンの実はめったに花屋で売られていない。たまたま売られていたので、独楽のような器にいかしてみた。

アダンの実も腕が折れそうなくらい重たい。腰が抜けそうな器だから、腕が折れそうなアダンの実も、すんなりとおさまってくれた。こんなに底が小さいのにだ。器と花の相性とはなかなか面白い。

黒に近いほど濃い緑色のアンズリウムの葉と、華やいだ色彩の赤紫色のバンダで、南国のとり合わせにした。

アダン（阿壇）は蛸の木科の常緑小高木で、亜熱帯から熱帯の海岸近くに群生する。葉にはすどい棘がある。

花材 アダン（蛸の木科）

バンダ（蘭科）

アンズリウムの葉

花器 陶扁壺



落ちない実

櫻子

秋になると色んな実をいけるが、赤い実で特に好きなものは、梅もどきや七竈、ガマズミだ。

日本には十五種類ほどのガマズミがある(ガマズミ、ミヤマガマズミ、コバノガマズミなど)。葉は丸葉で実より遅く紅葉するものもある。

梅もどきのように小葉を全部取り去ってから出荷される実も多いが、ガマズミは虫食い葉も残っていて、それが素朴で可愛らしく実の赤さを一層引き立ててくれる。

山では二メートル位の低い木なので日頃は目立たないが、実の季節には見つける事が出来る。

ガマズミで果実酒を作ると赤いお酒になるらしい。昔から天然の着色料としても使われてきたくらい、赤い実の色は鮮やかで透明感がある。

ガマズミの語源は噛み酢実とか神ツ実(神の実)が転化したものと言われる。古くから日本の山に育っていて、寒くなると甘みを増す甘酸っぱい実で豊かな山の幸であったのだろう。

いけていても、実は落ちないし、甘くなるまではしっかりと実のつていてくれた。そんな力強い実りに上品な糸菊を添えた。

花材 莢迷の実(忍冬科)

糸菊(菊科)

花器 濃紫色陶花瓶

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014 年
11 月号
No.617

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





山野草の紅葉こうよう

△表紙の花▽ 櫻子

山芍薬の葉はバラバラで間が空いていけにくいと思っていたが、見事に茂ってしかも色づいている。2本花瓶にいただけでも充分迫力がある。長くは持たないが、一時でも山の命を感じることが出来る幸せ。山採りか栽培か、いずれにしても採る人や育てる人に感謝の気持ちをもって、大切に花をいけたい。

特別な花材には、いい器を。蔵の奥から大きな花器を出してきて、山芍薬をいけるとびたりとおさまった。鍾馗水仙（リコリス）と紅葉した薄の葉は、季節の色と空間のひろがりに。

花材 山芍薬の実と葉（牡丹科）

薄（稲科）

鍾馗水仙（彼岸花科）

花器 掛分花瓶（清水保孝作）

赤い実のなる木

△2頁の花▽ 仙溪

秋から冬にかけて、赤い実をいけることが多い。稽古にもよく使うものに野茨や鈴薔薇、藪山査子がある。少し高価なものでは七竈、飯桐、山婦来、びバーナム。お正月の南天や千両、万年青も赤い実ができる。そしてさらに高価な赤い実の花材として梅擬がある。

日本の本州、四国、九州に分布す



る落葉低木で、葉と花が梅に似ていることからこの名前がある。

葉が自然に落ちる前に切るのので、出荷前に葉をすべて落とすのが大変らしい。実の大きい「大納言」も見事だが、父は作例のような小粒の実がまばらに付いた野趣のある枝のほうが風情があつて好きと云つていた。季節の菊を合わせると凛とした空気がただよ。

花材 梅擬(繡の木科)

糸菊(菊科)

ピンボン菊(菊科)

花器 碧釉花瓶

西洋陶器にいける

△3頁の花▽ 櫻子

糊空木の園芸種「水無月」は、白い装飾花が無数に集まって大きな花序をつくっている。どこか外国の香りのする花なので、花器には、デルフトを選んだ。デルフト陶器はオランダの焼き物。「花ふたり旅」ではこの器に母が二種類の向日葵をいけている。絵付けに赤色が入っているためか、秋色の花が似合う。私も母と同じ色合いを合わせている。

水無月の優しい秋色はあえて後ろに配置し、木苺の濃い秋色を前に重ねて全体を引き締めた。明るい黄色の薔薇で、色調にメリハリをつけた。

花材 糊空木(紫陽花科)

薔薇(薔薇科)

木苺(薔薇科)

花器 デルフト陶花瓶



蔓梅擬の立花

〈4頁の花〉 仙溪

花材 蔓梅擬 油灯台躑躅 鶏頭

糸菊 竜胆 伊吹 苔木

花器 大谷焼花器

今月号は掲載できなかったが、「立花時勢粧」の内容を通して、立花により興味を持たれた方も多いと思う。立花には九つの役枝があり、それぞれが互いに影響しあって一瓶の立花が成り立っている。非常に複雑ないけばなだが、全体の風情というものを大切にしたい。形になればなんでもいいわけではない。





姫柢木 〓5頁の花V 仙溪

花型 草型 留流し

花器 竹筒

柢木は錦木科の常緑低木あるいは小高木で、生垣などに利用される。作例の姫柢木や、大きな葉で斑入りの鼈甲柢木が生花の花材になる。

ちなみに、蔓梅擬も同じ錦木科である。

姫柢木は枝にねばりがあるので、生花の稽古にはもってこいである。草型、留流しにしたが、留の枝の切り口を工夫しないと、枝先が前へ来てしまうので注意のこと。



■ 冒頭発言

和食と京と広島 世界が認めた自然の恵み (詳報)

祝いや弔事の場合に不可欠 荒木さん



京都の伏見、魚三樓という料亭を営んでいます。1764年に初代が四国の讃岐(香川県)から出てきました。江戸時代、伏見と京都は連う町でした。江戸、大坂、京の三都に次ぐ都市の一つで、伏見港という港がありました。伏見は幕府の直轄地です。参勤交代で西国の大名は、三十石船に乗って大坂湾から1日がかりで江戸上って来た。そこに藩邸があり、休んでいくんです。そういう歴史の中で私も、できるだけ瀬戸内海の魚を使った料理を提供しようとも目指しています。

タイという魚は、日本中で珍重されます。おいしい魚です。昔は、タイのことを魚(うお)と呼んでいました。高級魚を表すのが、魚三樓の「魚」です。京都の料理とはどんなものか。宮中料理である有職料理、武家の本膳料理、京都には数多いお寺の精進料理。そして茶の懐石料理。それらが半々合体して、町衆に食べやすくなったのが今の京料理といわれています。有職料理といっても、食べる機会とはほとんどない。本膳料理も今はなかなかありません。けれども、そのエッセンスは京料理に入っていると思います。京都は、本当に四季が表れやすい。冬は心から冷えます。春は桜を染める。夏は嫌というほど暑い。秋になると紅葉ですね。それをいかに料理に落とし込み、目で楽しむのが、京料理です。和食が無文化遺産となりました。季節感があり、多様な食材があり、いろいろな調理法があるのが日本料理です。正月は、旗で祝い、春は花見でつげをする。そうした多様な祝いや弔い事がある。家族や知人が集まり、会食をする。そうした役割も文化遺産に選ばれた理由の一つです。

もう一つは、口の中で調理するということ。つまり一汁三菜。白ご飯を食べるために、おかずを食べ、ご飯を食べ、みそ汁を飲む。いろいろな食材を複雑に食べるのは日本人の得意なことです。京料理はそうした和食らしさを多く含んでおり、次の世代に伝えるべく頑張っています。

普段のご飯作りを大切に 桑原さん



私は、京都の真ん中、中区に住んでいます。まだまだ京都には、街中にも町家がたさんあります。江戸時代から続く、いけばなの家をいまも、夫が15世家元を務めています。玄關を入ったところに細い路地があり、長さは30メートルあります。路地を入ったところから、最初は緊張して来られるのですが、水が張ってあるので、季節の花を飾っているの、ほっとされるようです。そんな思いをしてみたいです。家の至る所に花があり、箱の上に飾り、もちろん高草にもあります。中庭には用砂を敷き、季節の木、花を植えています。

うちの流派を始めた桑原富春軒仙溪は、立花の名手でした。自然をうまく取り入れた花を立てたです。立花はいけばなの元の姿。お寺の本堂や仏壇の供花など、これに近い形を覚えたかと思えます。立花は江戸時代中期になると、もう少し生けやすい生花という形になりました。

私は小さい頃からおばあちゃんにご飯を作ってもらい、昔ながらのおいしさを食べてきました。それがあまり好きではなかった。でも今は、常備菜にもなり毎日の食事にうまく取り入れた、と思っています。

何でもない普段のご飯を作ることを大切にしたい。いけばなも本職で大切な事です。私が、私は数ヶ月に一回、料理サロンという、いろんな人に料理の魅力を伝える教室を開いています。そこでは、楽しいような料理を提案しています。自分では、ほんの少しの生花が1番似合うと思っています。

広島湾北側は「箱庭の海」 川上さん



広島湾の魚介類で一番に挙げられるのがカキ。養殖の始まったのは、江戸時代の初期、広島を封じられた浅野長晟が伊予(和歌山県)から持ち込んだとされる。石に種を付けて沖にまいて大きく育て、家で食べるくらいに採れた。それが、浅瀬に置いた竹や細い枝に幼生を付着させて育てる「ひび連」が導かれて発展した。私が長年暮らしてきた広島市東部の丹那地域では、1780年ごろにひび連ができた。南風を受ける広島湾は地域ごとに建て方が違っています。

今の若い人には想像できません。私が、私が子どものころは丹那沖にも広々とした漁場があり、すく数の生き物がすんでいた。波止場を抜けて一歩外へ出ると、もうシヤク(ナシヤク)の穴がある。20匹、30匹と釣って、天ぷらにしてもいい。そのうまいこと、今の若い人は想像しにくい。海のものに見向きもせんようにあげたら、すく海に戻って来。絶対。それくらい、おいしいから。

じっくりと時間をかけて育て、ガザミというワタリカニを捕る。前の晩に仕掛けに朝に揚げる。と、15匹も20匹も捕れた。貝もオノガイ、マテガイなど。これらも天ぷらがうまい。タコもマダコや手長タコがおつて、ウチキもよかったです。

広島湾の魚介類で一番目撃力が高いのは、イナメアノコ、ウミタナコ、ギザミ、キスと、いろいろな魚がカキのかたの周りにいる。近年はアマモ場がなくなり、メバルやカレイ、コウハギが減ってきた。箱庭の海で取れた地物の魚は最近、広島湾の市場でもくわすか、近海物といっても、山口や岡山などから来る。私たち漁師にはどうにもならない面もあります。

広島・京都文化フォーラム2014

多彩な味わいやヘルシーさから、海外の人たちも魅了する和食文化を再発見しよう。「和食」京と広島 世界が認めた自然の恵み

9月20日、広島市中区の中国新聞ビルで「広島・京都文化フォーラム2014」(中国新聞社、京都新聞社主催)が開かれた。京料理店の主人、華道副家元の料理研究者、広島のパネル漁師が昨年、国連教育科学文化機関(ユネスコ)の無形文化遺産に登録された和食を未来に伝えていくヒントを探った。

パネリスト 「魚三樓」主人 荒木稔雄 華道桑原専慶流副家元・料理研究者 桑原櫻子 元広島市丹那漁協組合長 川上清

コーディネーター 中国新聞社文化部長 渡辺拓道



松一色 〆9頁の花〷 仙溪

花型 行の行

花器 銅立花瓶

日本いけばな芸術展の歴史展示に
立てた立花。真の幹は自然の曲がり
である。正真の晒木が効いてくれた。

第47回 日本いけばな芸術展

テーマ「花という未来。」

会期 10月8日(水)～13日(月)

会場 大阪高島屋7階

1次展

2次展

3次展

10月8日(水)～9日(木)

10月10日(金)～11日(土)

10月12日(日)～13日(月) (祝)







出会い花 (14) 仙溪

秋海棠

上臈杜鵑草

石清水のそばでしっとりと咲いている、そんなイメージでいけてみた。自分の中では上臈杜鵑草も秋海棠もそのような場所に生えている光景が目につかぬ。清水の周辺の空気は湿り気をおひて、葉はつねに潤っている。

秋海棠は中国原産の多年草。日本には江戸時代初期に渡来した帰化植物。ペゴニアの仲間特有の偏った形の葉をしている。

上臈杜鵑草は杜鵑草の仲間だが、花の形が全く違う。名前につけられた上臈は、仏教用語で年功を多く積んだ高僧のことをさすらしい。

ごつごつとした土っぽいやつに水を満たしていける。口の片側に寄せた水面が見えるように。こんな素朴な感じのいけばなが、意外と難しい。

花材 秋海棠(秋海棠科)

上臈杜鵑草(百合科)

花器 焼締花瓶

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015 年
11 月号
No. 629

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





ぶらさがる

△2頁の花▽ 櫻子

春には美しい花の房を下げていた藤も、秋になると劇的な長細い実が蔓にぶらさがっている。藤棚であれば、さしずめ自然のシャンデリア、ではないにしても、見ていて楽しい気分になる。

とは云え、これだけ沢山ぶらさがった枝をいけるのは容易ではない。重量バランスを考えつつも、花は前方へ出すことで、藤の実のボリュームに負けない奥行きをつくる。

取り合わせには4色のピンポン菊を選び、藤色の杜鵑をたした。藤の実にカラフルなピンポン菊がよく似合っている。

花材 藤の実(豆科)

ピンポン菊4色(菊科)

杜鵑(百合科)

花器 市松模様陶花瓶

◆横から見た、いけばなの奥行き。



しなりの美

△3頁の花▽

櫻子

頭くさねを垂れる稲穂を見ると、自然の恵みに感謝の気持ち湧いてきて、心の中でこちらも頭を下げている。

今年も新米の季節がやってきた。

この時期、花屋にも少量の黒米が売られる。赤米あかこめや黒米くろこめは古代米と名付けられてから栽培が増えてきたぞうだ。いけばなでも独特の存在感が出せる花材だと思っ。

私達の命の糧かて、その元の姿を愛でることもまた、心の糧となつて、より深く自然との関わりを感じる事ができる。

相手には、同じくしなる姿の上臈じょうろう杜鵑ほととぎすに、大輪のピンクの菊を選んだ。

垢あかぬけ抜けた華やかさと可愛さを兼ね備えた菊は、恵みへの感謝の気持ち。

花材 上臈杜鵑じょうろうほととぎす(百合科)

黒米くろこめ(稻科)

菊「飛驒ひでたマム」(菊科)

花器 籠花入かごはないり(桑原健一郎作)



◆横から見た、いけばなの奥行き。

赤芽柳

△表紙の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 留流し

花器 耳付銅花瓶

赤芽柳は別名をフリソデヤナギ(振袖柳)とも呼ばれ、花芽が大きくなって、赤い芽鱗片が落ちたあとの花穂はいかにも春らしい。

しかし、生花にいけるなら、まだ花芽が小さくて固い初冬がいい。日の当たる側、いわゆる日表ひおもては、枝肌も花芽も赤みが強いので、日表の側が手前になるようにいける。本数多くいけるなら、銅器がよく似合う。

真(序)

留(急)



副(破)



基本花型にいける

主材 紫式部(紫蘇科) ※熊葛科から移動

副材 竜胆(竜胆科)

木苺(薔薇科)

花器 陶水盤

紫式部には枝が直立するものと横へ伸びるものがあるので、その性質にあわせて花型を考える。作例の枝は横へしなるような枝振りだったので、斜体型を選んだ。

一本の枝から十本以上の長い小枝が出ていて、そのままでは大きすぎるため、小枝を切り離していている。

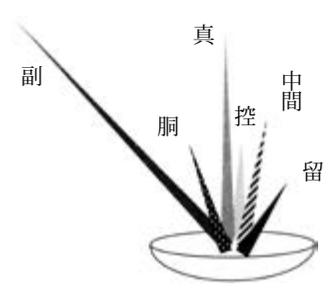
紫式部の実には茂った葉を合わせたい。秋色に色付きはじめた木苺(構母)はよく映る。白色と青紫色のしぼりの竜胆で、彩りを深めた。

◎剣山の主要部分の説明

それぞれの役枝を剣山に挿す場合、位置と方向は、およそ左の図のようになる。



斜体副主型



横から見たところ。





③ 中間の位置に竜胆を低めにさす。やや前傾させている。



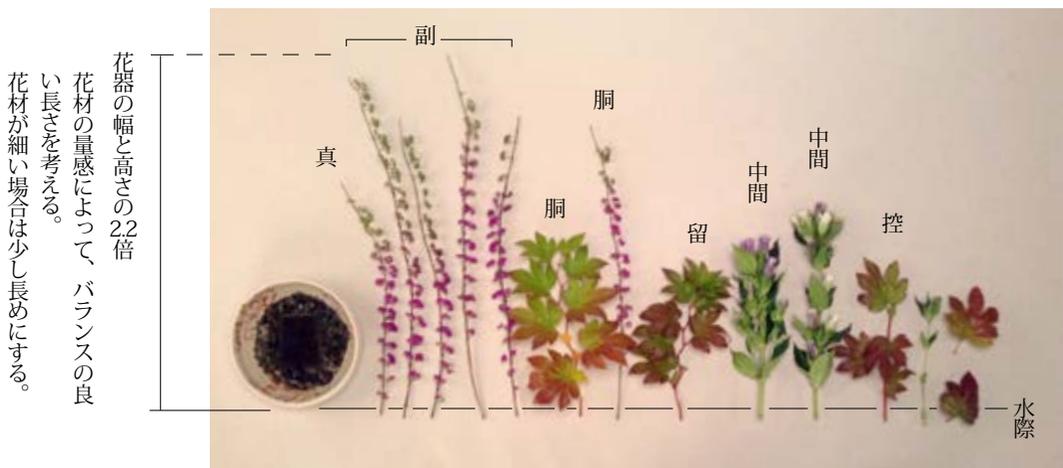
① 主材の紫式部の実を、いけあがりを想像して、副の位置に5本ほどさす。先まで実がない枝は適当に途中で切り縮めているが、自然な切り方を工夫する。



④ 留の位置に木苺を加えたところ。中間にもう一本竜胆を立て、竜胆の脇枝と木苺の下枝を控の位置に加える。(4頁の花)



② 真の位置にも紫式部の実を一本立てて奥行きをつける。胴の位置に木苺を出す。副の伸びを引き立てつつ、水際を整える。同じく胴に紫式部の実も一本加えて、奥行きをつくる。



花材が細い場合は少し長めにする。
花材の量感によって、バランスの良い長さを考える。

それぞれの長さ。主材の長さは、花器の幅と高さを足した長さの1.5〜2倍を目安にして、水の中の深さを加えて切る。

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ⑰

立花秘傳抄 五

立花名目 並びに 訓解 (つづき)

正心の事

直心立の時すくじんだては、心の前に立つるにより、心かくしと名付く。除心の時は直なるもの一瓶のうちこれより外にあらざるにより、正心と名付く。また小心とかく時は直心の大にかわりてすなかなるを立つる心なり。

正心の高さは、松じん四尺ある時は、禿松二尺に立つべし。これ定法なり。梅、柳などの細き物ならば、高く指すべし。また心に梅、柳などを立つる時は、右の格を以て、正心よろしく立つべきなり。

除心の正心は心の前より立つる流もあり。また後ろより立つる流もあり。前より立つる時は、花形丸く、後ろより立つる時は、花形ひらめなり。

されば花形にしたがい、時によるしく立つべきなり。

心少し除たらば正心ほそきものを用ゆべし。広くのきたらば、大輪なるものを用ゆべし。心の幹ふときには柔らかなるもの、草の心には草を用い、水仙、杜若は花より葉を高く、紫苑、萱草は下に葉をあしらう。南天、わくら、かなめの正心には口伝あり。つづじは下へつかいさげ、引き松は正心に用いず。檜は地生えを用い、薄は穂を用ゆ。草木にかぎらず出生の直なるもの、みな正心に用ゆべし。

副の事

副を古代は露請と名づく。云うところは外の枝より高く、心の葉陰にのぼせて、松の葉を請ると云う心なり。然るに中頃より副と云う。心にしたしく副のぼると云う義なり。たとえば大將軍に副將軍あるが如く、一方の花形を守り、心に勢いあらするは、副の役なるべし。

副はやわらかに、しだれるものをよしとす。心すこしのきたらば、直ぐなるものを立て副べし。広くのきたらば、なびきたるもの、葉のなきものには茂りたるもの、水ぎわのきにはきおいたるもの、幹狂いたるには内副に立つべし。松の副は細くやわらかなるを用ゆべし。或は大葉一枚にて副をあしらうもあり。

上手の副を付ると云うは、心にそうべき枝葉をよく見定め、出生のかたちにまかせ、念慮を入れずして、そのまま副する時は、自然の景気うつりておもしろし。初心の人は草をため、木をゆがめ、執着のころを以て、強いて副うるに、立てて後まで、思慮分別のところ花にあらわれて、つたなく覚ゆるなり。巧者はこの域をよくよく工夫すべし。

師語を作りて、副を付ることを教ゆ。副うて副わざれ、除いて除かざれ。誠にこれ中庸の道理にして、添いすぎたる時はいやしく、除きすぎたる時は、うつりあしきなり。

請の事

請と名のる事、心の勢いを請持つという義なり。心おもき時は請おもく、心かろき時は請かろし。副しだれたるものならば、請はきおいたるもの、副きおいたる物ならば、請はしだれたるもの。心、副、直なるものならば、請は風流に狂いたるもの。竹の請には習いあり。

請は心に次いでの大枝にて、専ら賞翫する枝なれば時の珍花を用ゆべし。

見越の事

見越と名付くるは、山を見越して高木の梢を眺める心なり。されば庭前に山を作るに、見越あるが如し。さるによつて、小木高草を用いず。

見越と前置は前後の釣り合いにて、前置おもき時は見越おもく、前置短く出る時は、見越もまた心にそえて立つべし。

除心の見越は、さのみ左右高下をきらはず。正心こはきものならば見越やわからかに、正心色なく細きものならば見越は花やかに、大手なるものを指すべし。

藤、南天などのしだれたるもの、見越に用いる時は、兼ねて見越所を広くあげ置き、幽玄体になびかして指すべし。梅、水木の細きものは、正心より高く立つべし。

流枝の事

流枝と云うは、水ぎわ低く横へ長く流るる景色あるゆえ、流枝と名づく。また長枝とも書くべし。一瓶の内ひくく出すもの、流枝を定法として立てる。これ水ぎわの習いなり。

草木の横へはえ出るもの、いづれも流枝に用ゆ。しかれども葉先勢いなきものは用いず。広葉のたぐいならず。梅のずわひ心得あり。苔晒木の流枝は、いかにも細きを用ゆ。

流枝の出口、きつくりと出すべからず。本にできおい、中にて沈み、すえにてあがる様に指すべし。出口は花葉を以てあしらいかけ、いやしからぬ様に出すべし。

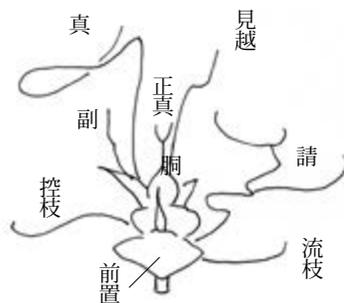
流枝は心と見合わせ、副と見合わせ、控枝と見合わせて、胸前よりのうつりを第一とす。

流枝は瓶の後ろ隅より出して、梢を前へふらす。然れども前置より前へは出すべからず。瓶の口より梢さがる事を嫌う。請と流枝の梢、同じきを嫌う。





◆斜め前から見た奥行き。



松の立花 仙溪
 花材 松 あらぎ 木瓜 糸菊
 晒木 小菊「赤頭巾」
 毬栗檀 いかりまゆみ
 花器 銅立花瓶



生花

葉蘭九葉

仙溪

花型 行型

花器 煤竹竹筒

九月の家元研究会では、葉蘭九葉の生花を稽古した。テキスト613号、616号にも葉蘭の解説があるので見返してほしい。出生や独特の深みについて書いている。

葉蘭の生花は数多く活けられることが大切で、巧みな葉つかいの技巧を自ら体得して、自らがその技法を開拓してゆくような研究態度がないと、美しい花形は作れるものではない。これは方法を知ることではなくて、自らが切りひらくような技術の生花である。理解すれば意外に簡単なものだが、それを理解しようとする熱意と努力が最も必要な生花である、ということを知らねばならぬ。
 (「専溪生花百事」より抜粋)

真(序)

留(急)



副(破)

◆横から見たところ。





立花

丸葉の木 (紅満作) 仙溪

花型 行の真

花材 丸葉の木 檜扇の実

杜鵑 藪山查子 龍胆

糸菊 嵯峨菊 (園芸種)

花器 陶花瓶

丸葉の木の紅葉を真、請、控枝に使っている。稽古で立てた初歩的な立て方だが、秋らしい色彩の立花だと思ふ。



◆横から見た、立花の奥行き。





出逢い花 (24)

仙溪

野茨の実 (薔薇科)

鶏頭 (寛科)

赤い実に赤い花を出逢わせて、黒い器に付けてみた。

撮影のあと、床の間に飾ったが、水辺の黒い杭に留まる鳥の絵の軸とぴったり合っていた。いい出逢いが生まれたときは、素直に嬉しい。

花器 黒釉陶花器

陰陽五行

現在使われなくなった旧暦(太陽暦)に興味を持つと、陰陽五行思想にゆきついた。日本文化に携わる者として、そんなものもっと早くに知っておけ、とおしかりを受けうだ。

今、吉野裕子著「陰陽五行と日本の民俗」を読んでいるところだ。まだ最初の数ページだが、とても難解でも非常に面白い。古代の中国で生まれた哲学だが、天地のはじまりも陰と陽で説明でき、木・火・土・金・水の五元素(五気)の作用と循環、すなわち五行によって、万物が生成され、自然界が構成されている、というもの。

要するに陰陽五行の法則を知っていると、自然のことがストンと理解できるのではないか。そうだとすると、修める価値は非常に高い。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016年
11月号
No.641

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





メラレウカ

仙溪

花材 メラレウカ（フトモモ科）

リコリス（彼岸花科）

ダリア（菊科）

花器 陶コンポート

メラレウカはオーストラリアの樹木でユーカリと同じくフトモモ科。作例のように黄金色になるものや赤くなるものなど種類が多く、芳香があつてハーブとしても利用される。オレンジ色の器にたっぷりのメラレウカを集めて、リコリス、ダリアで色の濃淡を楽しんだ。

メラレウカの木。大阪花の文化園。



横から見た見た奥行き





ムラサキシキブ

櫻子

花材 紫式部むらさきしきぶ(熊葛科)

上臈杜鵑じやうろうとく(百合科)

秋桜あきざくら(菊科)

花器 陶花瓶

ムラサキシキブのような色の実ほ他にあるだろうか。独特の美しさがあつて好きな花材だけれど、とり合わせに悩む。でも今回のとり合わせは自分でも気に入っている。

紫とは反対色の黄色。そこに桃色が少し加わることで紫の鮮やかさが増した。

立ち上るムラサキシキブと垂れ下がるジョウロウホトトギスの形の対比も面白い。コスモスの優しい葉の緑が、紫色の小さな実の足元をほどよく包んでくれた。

濃色の艶やかな花瓶が、色彩の引き締め役になつてくれた。

横から見た奥行き





赤い実に紅葉を

△4頁の花▽ 桜子

花材 鈴薔薇(薔薇科)

木苺(薔薇科)

薔薇(薔薇科)

花器 三足蓋付陶深鉢

赤い実に紅葉が重なる、互いの相乗効果でより強く秋を感じられるのに加えて、実と花だけでは表現できない華やいだ明るさを感じることが出来る。そしてなによりも実の表情が優しくなるような気がする。

秋色を際立たせようと、純白のバラをとり合わせた。子孫を残す実とやがて散る赤い葉と大きく咲こうとする花の対照が美しい。

3種の花材を料理するような気持で、鍋型の器に付けてみた。

横から見た奥行き



梅擬と紫蘭

△表紙の花▽ 桜子

花材 梅擬(繡の木科)

紫蘭(蘭科)

白椿(椿科)

花器 耳付陶花瓶

梅擬の小枝を使って軽やかな投入にしたいと考え、色付き始めた紫蘭をとり合わせて、白椿で口元を引き締めた。

梅擬の艶やかな赤い実对白椿を添えると、凛とした美しさが生まれる。そこに紫蘭が加わることで雰囲気はずいぶん変わって見える。表情が柔らかくなり、優しさが加わる。

器も優しさを感じるものがいい。ほんのり赤みのある温かな風合いの陶花瓶を選び、朱の敷板に飾った。

横から見た奥行き



京都市芸術文化協会創立35周年記念事業
京の文化絵巻Ⅰ
花鳥風月

会期 9月11日(日)

会場 ロームシアター京都

「鳥」の部 華道 桑原仙溪

邦楽、邦舞、洋楽、モダンダンス、能楽、狂言、書、今様、華道。総勢150人による舞台に参加させていただいた。杉信太郎さんの横笛に合わせ、今様の舞手に介添えをしていただき、雌雄の鳥をイメージした花をいけた。器は柳原睦夫氏の銀オリベ。花材は2.5mのカナリー椰子の新芽など。命の躍動を感じていただけたと思う。



立華時勢粧りっかいましようすがたを読む ⑳

立花秘傳抄 一

常磐木之部とどきわぎ (つづき)

棕櫚しゆろ

非祝言。上。

正心、副、請。

朝鮮棕櫚は胴にも用いる。

棕櫚竹また面白き物なり。さりながら客花

には用捨すべし。

詩に曰う。棕櫚の葉散しゆろじて夜叉の頭かさら。

古歌

朝またき梢はるかに音つれてすろの葉過
るむら時雨かな

杉

非祝言。上中。苔、晒木用いず。

古歌

いつしかに神さひにけりかく山の銚杉か
もと苔のむすまひ

苔を遣いても苦しからざる證歌ありといえ

ど、古来より苔を付けて立てる木、法式の外は

これを許さず。然れども自然と苔の付きたる心しん

あらば、外の苔木を借り用いてもくるしからず。

古代は賀茂かの神杉とて、若木の色よき、葉の

茂りたるをもとめて多くさされしと師の云え

り。然るに近頃は杉は魔のすむ木なりとて立て

ざるもおかし。詩に作り、歌に読みてやさしき

物なれば、今様にこれを用いる。されども客花

には用捨すべき物か。

うすの木 夏ばせ

祝言。

胴、流枝、控枝、前置。

幹太きは請にも用いる。

この二木、春の暮れより秋のなかば半まで紅葉

するゆえ、照葉てりばと名付けて瓶毎に用いるなり。

かならず葉先をつくろい、葉を重ねて見事

に見せんとすることなかれ。照葉はやわらか

に軽く立てるをよしとす。

ふしくろ

非祝言。下段。

栗の若はへ

祝言。下段。

檜の葉

祝言。下段。

まゆみ

祝言。中下。

衛矛まゆみ、鬼箭まゆみ。

猿すべり 猿滑

非祝言。中下。祝言に用いず。

證歌

足引の山のかげちの猿なめりそれらかに

ても世を渡らばや

柞

祝言。中下。

木ふときは請にも遣う。

櫛木はこそ（多識）。

四聲字苑しおんに云う。梳くしを作る。藻塩草そうしんそうにこな

ら栢かしわこれ柞なり。

今回出てきた棕櫚しゅうろを使っているのは二図あり、第三十二図・棕櫚しゅうろしん真砂ま金沙の物は以前掲載したが再び載せておく。雄株に棕櫚の古い株を立て、そこから若木が生まれた姿。棕櫚の素直な広がり、雌株の屈曲した晒木でバランスをとっている。

第四十一図では棕櫚が見越と副に大きく使われ、請にさらりと夏櫨を出している。竹型の器が目を引く。

※参考文献
『いけばな美術名作集 第三卷 立華時勢粧』（日本華道社刊）
『花道古書集成 第一期第二卷』（大日本華道界刊 思文閣出版刊）
※立花図転載
『華道古典名作選集 立華時勢粧』（思文閣出版刊）

同行之花秋



第三十二図

二株砂物 棕櫚真
砂の物行の花形 西村松庵
棕櫚 百合 晒木 松 苔 嫩 杜若
小羊齒 栢植 苔木



第四十一図

立花 松除真 高橋古兵衛
松 棕櫚 夏はぜ 杜若 檜木
躑躅 著我 下野 嫩 晒木

柞さく、なら、ははさ、いすのき 原文にルビが無いので読み方不明。

早蓮木^{かんれんぼく}

花材 早蓮木 (沼水木科)

木苺 (薔薇科)

ピンポン菊 (菊科)

赤色
黄色

花器 練込陶花器

(写真①)





赤い実と菊いろいろ

仙溪

花材 野茨(のいばち) (薔薇科)

白糸菊 黄飛驒マム

スプレー菊 小菊 (菊科)

花器 陶花瓶

先月号で兵庫サンバマムと梅擬(うめもじぎ)の盛花を掲載したので、今月は飛驒マムを一本混ぜて野茨と投入にした。

野茨を広げた間に、前方へ長く4種類の菊を出している。

飛驒マムには多くの品種があるので特徴を一言では言いにくいですが、ダリアのようなモダンさと、茎も葉も大切に育てられた和の姿の両方を兼ね備えた菊というところか。

菊は咲ききった後、水溜に浮かべて楽しんでいる。





水仙一色立花

〆10頁の花〆 仙溪

花形 水仙一色立花 真の行

花材 水仙(彼岸花科)

小菊(菊科)

花器 陶立花瓶

水仙の季節がやってきた。まずは真の花形で水仙一色立花を立ててみた。

葉に針金を入れ、自然な葉の動きを想像しながら形をつける。カクカクして、針金が入っていると分かってしまうようではいけない。といって形をつけず真っ直ぐなままではかえって不自然だ。怖がらずに曲げてみるのも大切である。

藪山査子

〆11頁の花〆 仙溪

花型 草型 副流し

花材 藪山査子(雪の下科)

花器 煤竹竹筒

今年の10月は藪山査子の稽古が続いた。この写真は最初にかけたもので、別れ枝を副に選んで、伸びやかな枝の動きを生かしている。この後5作いけたが、どれも違う感じに上げ上がった。その都度枝の個性も変わるのだから、納得のいく姿にいけるのはなかなか難しい。散らずに残った葉がアクセント。



ゴンチャン先生と レモン師匠

日々のいけばなを紹介したくて、家で飼っていた猫のゴンちゃんの写真を混ぜ「ゴンチャン花日記」というブログを始めたのは、私が家元を襲名した年だった。その後ゴンちゃんがお星様になり、3年後にレモンがやってきた。今は「ゴンチャン先生」と名のつてインスタグラムという所に写真を投稿している。いつも花を見に来るレモンは皆に愛され「レモン師匠」と呼ばれている。

猫に助けられ、時には教わることも多いわけだが、花も猫も人間も命を育む仲間なんだなあと、しみじみ感じている。今後とも、ゴンチャン先生とレモン師匠のコンビをよろしくお願いします。





出逢い花（35）

仙溪

南瓜（瓜科）
かぼちゃ

葉鶏頭（寛科）
はげいとう

花器 天目釉酒器

岡山の原田先生から今年も南瓜をいただいた。なんともいえない存在感があったので、出逢い花の片方の花材として使わせていただいた。

出逢わせたのは小さな鉢で売られていた葉鶏頭。葉鶏頭を切って酒器にいけ、南瓜の横に置くだけで絵になっくれる。でも折角なのでもう少し面白い出逢わせ方はないかと考え、南瓜の上に乗せてみた。

写真のようになったわけだが、自分ではこれでいいのかどうかよく分からない。分からないけれど、自然の恵みに対する感謝の気持をこめて、大切にいけた結果なので、写真に撮ることにした。

いただいた箱からこの南瓜が出てきたときに感じた神々しさよりも、どちらかと言えば剽軽な感じになってしまった。でもひよっとすると、南瓜の原産地、中南米の森の神様はこんなお姿かもなどと、想像して楽しんでる。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017年
11月号
No.653

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





枝垂れを楽しむ

△2頁の花▽ 櫻子

花材 更科升麻・晒菜升麻

(金鳳花科)

山鳥兜(金鳳花科)

木苺(薔薇科)

花器 陶花瓶(林平八郎作)

サラシナシヨウマの伸びやかな白い花穂は、一本一本かたちが違って自然味がある。とり合わせにも、自然の風合いが感じられる相手を選みたい。長く枝垂れたヤマトリカフトと共に長く前へ出し、足元に色付いた木苺を加えて両者をつないだ。

横から見た奥行き





ダンシング・レディ
ス・ジンジャー

△3頁の花▽ 櫻子

花材 グロツバウイニティ

(生薑科)

アンズリウム(里芋科)

夏櫨の実(躑躅科)

花器 白磁花瓶

ピンク色のやじるべえが幾つも繋がっているみたい。その手の先に黄色い花が顔を出している。非常に個性的な花だ。グロツバ・ウイニティはジンジャーの仲間で、ダンシング・レディ・ス・ジンジャーとも呼ばれる。たしかに女の子達が両手を広げて躍っているような花だ。

淡い花色なので、深紅のアンズリウムを合わせると華やかになる。季節感を加えたくて、夏櫨の実だけになった枝を覗かせてみた。グロツバと一緒にステップを踏んでくれているみたいだ。

横から見た奥行き





水仙一色立花

△4頁の花▽

仙溪

花型 立花 行の行形
 花材 水仙（彼岸花科）
 花器 陶花瓶

昨年は二条城の二の丸御殿で水仙の立花を撮影する機会を得た。歴史を感じる場所にあわせて、立花時勢粧の絵図にある水仙一色立花を再現してみたが、葉が自由奔放に伸びていて、しかも絶妙なバランスを保っているのに驚かされた。

今年の1月末、淡路島の灘黒岩水仙郷へ自生の水仙を見に行った。180年前に海岸に漂着した球根を漁師が山に植えたのがはじまりで、今では500万本の野生の水仙が斜面に咲き乱れる。

大雪のあとで倒れているものもあったが、再び立ち上がるうとする姿は立花図の水仙そのものであった。波打つように伸びるものや、180度方向を変えるもの。自然がつくる造形は予想を遙かに越える。



淡路島の灘黒岩水仙郷にて

立花秘傳抄 二

実之部 (つづき)

たらよう

非祝言。上中。

苔、晒木を用いず。

仙蓼

祝言

古代は中までに用いる。今は水際に遣う。

みむらさき

非祝言。通用なり。上中。

一名、紫荊珠、紫荊花。江戸にては紫式部

といえり。

つる水木

祝言。通用。上中。

近代、遣い始めたる物なり。本名慥かならず。指し様、藤と同前なり。

第七十三図

- 立花 松除真
- 丸屋勘助
- 松 梅擬 鶏頭 杜若 雪柳(?) 椿 伊吹
- 苔 小菊 著我



下段から立ち上る真の松に、赤い実が景色をつくっている。内側と外側に寄り添いながら、弧を描いて伸びる枝には躍動感がある。花は鶏頭、秋の杜若、椿、小菊。色鮮やかな立花だ。大きく左に除いた真の松が、正真の空間をゆったりと作っている。

深山檜 みやましきみ

非祝言。非通用。水際に用いる。

深山は名を指すとて、水際の奥深く、又は前にも木かげに立つべきなり。草留の方に指さず。草は野なり。みやまにあらず。又景気もうつらぬものなり。

たちばな

祝言。非通用。水際。

燈籠草 おとうづき

祝言。水際。

異名、洛神珠、紅姑娘。

和名、ぬかづき、少人女中の客に必ず用いる。

えびついでばら

非祝言。水際は控に宜しい。

南天

通用の部に詳らかなり。

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』(思文閣出版刊)

第七十八図

立花 松除真

富春軒

松 柳 梅 水仙 栢植 椿 多羅葉 伊吹 菫我



「立花時勢粧・中」の最後を飾る富春軒の立花。立上る松の真は七十三図に似るが、こちらは真の出口が高く除きも浅い。左右の枝垂柳と松の形の対称が見事だ。その間の赤い実は「たらよう」だと思いたい。たらようはモチノキ科の常緑樹。別名ハガキノキで葉裏に文字が書ける。立花の魅力を伝え続けてほしい、との思いが込められているのでは。

高松・栗林公園

香川県は古くから讃岐国と呼ばれる。これは、国の形を見た時に、四国の他の国に比べて横幅が狭いことから「狭緯」(緯=東西の距離)と呼ばれていたのが、「讃岐」に変わっていったそう。

讃岐といえば、「讃岐三白」とよく云われるけれど、三つの白いものが何かと聞かれて正確に答えられるだろうか。正解は綿、砂糖、塩である。

讃岐は晴れの日が多くて雨が少ないため、常に水不足と闘ってきた。米作りのために作られた溜め池は一万四千余り。そのようにして苦労して米をつくる一方で、自然条件を

生かした特産物として生まれたのが綿と砂糖と塩であった。

綿花や砂糖黍は、温暖で雨の少ない気候に適した作物。そして塩づくりにには広い遠浅の海岸と晴天の日が多いところがむいてる。

近年「うどん県」と呼ばれるほどのブームとなっている「うどん」。こちらも日照時間が長いいため、古くから二毛作によって小麦の生産が盛んで、うどんに慣れ親しんでいたことも背景になっているようだ。

さて、10月はじめに高松を訪れたのは、日本いけばな芸術四国展のためであったが、朝の手直しのおとは高松周辺を散策することができた。



栗林公園にて。①南庭全景。②松と。③薩摩藩寄贈の蘇鉄。

イサムノグチ庭園美術館、屋島寺、港の倉庫跡を利用したアートスポット、とても長いアーケード商店街、うどん屋、骨付き鶏なども堪能した。どれも印象に残るものだったが、とりわけ感銘を受けたのが「栗林公園」である。

高松港から南へ約3キロ。紫雲山の東麓に位置し、面積75ヘクタールは文化財庭園としては国内最大の広さだそう。四百年近い歴史をもつ大名庭園である。

なんといつても低く拵えられた松の見事なこと。香川といえば鬼無や国分寺という松の産地が有名だが、松の生育に適した土壌と、松の手入れ技術が優れているのだろう。

栗林公園では丁度松の選定作業をされていたが、一千本の松の手入れはさぞ大変なことだろう。庭園内の小川では、丸石についた藻を5人の男性が、ひとつ一つ丁寧にこそぎとっておられた。気の遠くなる作業である。

昔、飢饉のとき、高松藩2代藩主の松平頼常は、被害に遭った人々を雇って庭園拡張をおこなった。雇用を生んで民を救ったわけだ。そんな藩主が愛した庭園ゆえに、高松の人々も愛着と誇りを持つ

ているのだろう。貴いことだ。その土地に根ざした文化の底力を感じた。いつか是非とも鬼無の松栽培も見てみたい。



丁字草 山鳥兜

〓 9頁の花 〓

仙溪

花型 生花 株分け

花材 丁字草 (夾竹桃科)

山鳥兜 (金鳳花科)

花器 陶水盤

楓の紅葉、銀杏の黄葉、ほかにも様々な植物の葉が秋色に変わる。きつと皆さんにも、この季節になると心待ちにする色があるのではないだろうか。

四国の花展でいけたオカトラノオの紅葉も心に残る色彩だった。

作例の丁字草も、その繊細な美しさは他の枝には無いものがある。黄色、オレンジ色、赤色、いろんな色の葉が混ざっている。ヤマトリカブトの紫色とは相性がいい。水盤で株分けにして、秋の輝きを楽しんだ。

カラスウリありがとう

〓 表紙の花 〓

仙溪

花材 烏瓜 (瓜科)

杜鰾草 (百合科)

薄の穂 (稻科)

花器 陶手付花器

カラスウリを葉がついたまま活けたのは初めてだ。これは丁度テキスト撮影に合わせてお弟子さんが届けてくれたもの。長い蔓の切り口に水をあて、一本ずつビニールに入れて大切に持って来て下さった。さぞ蔓

を外すのに苦労されたと思う。葉はすぐに萎れてしまったけれど、こうして写真に納めることができた。なんと贅沢なことだろう。いけばな冥利に尽きる思いだ。

その後、枯れた葉を取り去って、相手を変えながら、すでに一ヶ月以上いけて楽しんでる。写真では緑色だった実も真っ赤になってきた。カラスウリの種は大黒様の形なのだ。が、そろそろ取り出してみようかな。

横から見た奥行き



秋色を楽しむレモンちゃん。花は烏瓜、鉄砲百合、木苺。



①

創立50周年記念
日本いけばな芸術四国展
テーマ「半世紀の夢を咲かせて」

会期 10月5日(木)～10日(火)
会場 サンポート高松 玉藻公園・披雲閣 栗林公園

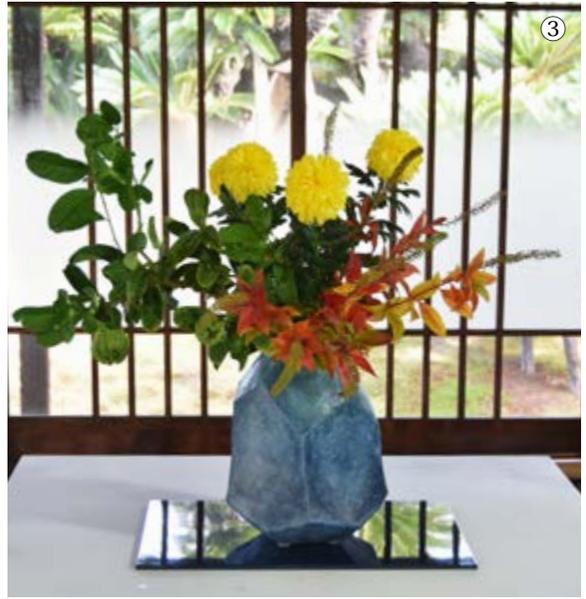


②

④



③



⑥



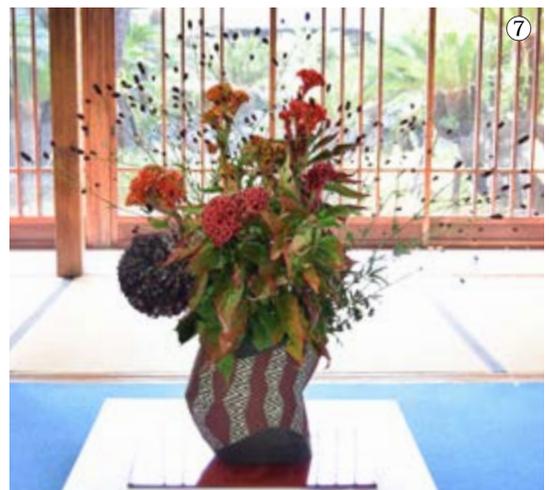
⑤



⑧



⑦





シーグレイプ 櫻子

花材 シーグレイプ(藜科)

アメリカネス(彼岸花科)

花器 ガラス花器

シーグレイプは浜辺葡萄とか心葉とも呼ばれる。丸い団扇のような葉が面白い。赤と黒のどつしりしたガラス花器にいけると、葉の葉脈の赤色が際立つ。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018年
11月号
No.665

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





小鳥の耳

△表紙の花▽ 仙溪

花材 鴨上戸の実 (茄子科)

ガガイモの花 (ガガイモ科)
薄の穂 (稲科)

花器 銅花器

鳥の耳がついた銅器に二種類の蔓植物をいけた。写真に撮ると、赤い実を食べにやってきた小鳥に見える。花をいけると物語が出来上がる。そんな器の一つだ。ハート形の葉はガガイモの葉で、小さな星型の花が咲いている。小鳥目線のいけばな。



横から見た奥行き

山芍薬の実

△2頁の花▽ 櫻子

花材 梅花躑躅 (躑躅科)

山芍薬の実 (牡丹科)

花器 公長齋小菅籠
桔梗 (桔梗科)

今年の秋一番きれいなヤマシャクヤクの実。みずみずしい葉に包まれ



横から見た奥行き

マユミの実をはじめて見た時、なんて可愛い色をした実なんだろうと思った。とても優しい薄紅色である。ピンクの二輪菊と金茶色の菊を合わせて季節を味わうことにした。

花材 真弓の実まゆみ（錦木科）
菊2種きく（菊科）
花器 三角錐陶花器さんかくすいとう（宮下善爾作）

ピンク色の実
△3頁の花▽ 仙溪



横から見た奥行き

るように育った一輪。弾けて赤（未成熟種子）と紺（種子）の実が派手に色を競い合う。春に清楚な白い五弁の花を咲かせていたとは思えないくらい強い強さだ。大好きな公長齋さんの籠に飾った。

第51回 日本いけばな芸術展

テーマ「みらい、かける。」

10月3日(水)～8日(祝)

大阪高島屋7階

①



③



②



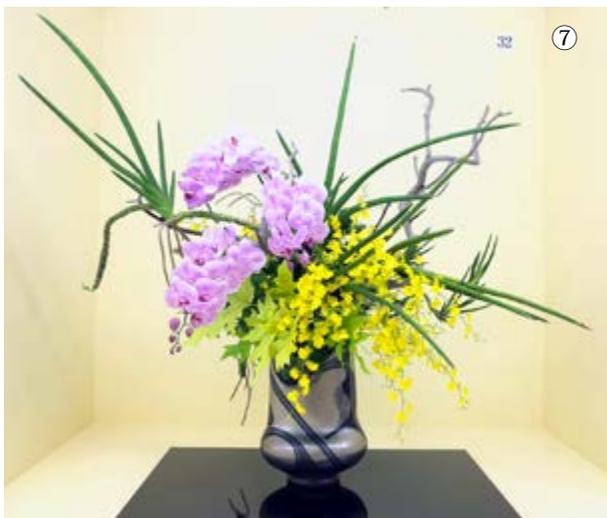
④



⑤



⑦



⑥





京都市自治記念式典
オープニングパフォーマンス
会期 10月15日(月)
会場 京都ロームシアター
曾和鼓堂さんの小鼓とのセッションで舞台上で花をいけた。(写真⑧)

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

早百合草さゆり

祝言。真に立てず。また出生、直ならざるゆえ正心に立てず。請、副より遣い下げて控枝までさがるなり。

この花早く咲くをもってこの名有り。

笹百合草。(その葉笹に煮たるをもって名付く)

本草綱目に云う、専ら百病を治す、故に百合草と名付くと、云々。

この花たおやかに葉つき面白し。一瓶に五本七本つかうとき同じようにならず。ひらきたる花、つぼみ、中ひらき取りませ、請の花空にむかいたらば副はうつぶき、右の方後ろむきたらば左は前にむかわせ、葉出生そむに背そむかず取り合いて一面に見る時、花々よくおもい

あいたるをよしとす。もし一輪にても、外の花と不相応なるを独遊ひとゆうとて嫌うなり。
なつりあへんひ

早百合草は花のしべの黄なるをとらざれば花そまりて見ぐるし。



第四十二回
立花 松除真
濱崎九左衛門
松 晒木 百合 柏 夏はぜ 柘植
小菊 小羊齒 杜若 蒼菰

葉たれさがる事あらば、竹のはりを指して
葉並びをつくろうべし。たむるには針がねを
用いる。

姫百合

祝言。

上より遣いさげては、水ぎわまでさかると
いえど短く指すことを嫌うなり。

異名、山丹花。さんたん 連珠。れんしゆ 紅花菜。こうかせい

和名、ひかり草。

古歌

夏の野を心しつかにわけ行は花とおとろ
く日かり草かな

姫百合やわらかなる物ゆえ、正心に立てる
時は物にたよらせて立つべし。惣て草の正心
には後ろより松をあしらう師伝なり。

洗百合草すかしゆり

祝言。心に用いず。上中。

越後すかし。べにすかし。そとの浜洗。心
に用いる百合草はこの三色ばかりなり。

あたご百合草
祝言。上中。

さかりゆり

祝言。上中。



第四十三回

立花 晒木除真

三好理兵衛

晒木 松 百合 薄 菊 檜木 夏はぜ
檜扇 小羊齒 伊吹

ためども
為朝百合草

祝言。上より中まで。

鬼百合に対して名付く。富士ゆりとも、うたゆりとも所に替わりて名異なるなり。

鹿子百合草

祝言。上中。

この百合草水ぎわに遣うことを嫌うといえど苦しからず、口伝あり。然るに当世は習いもなく遣いさげる。似たることの似ぬ事なり。この花にかぎらず大輪なる花、遣いさげて苦しからず立てようあり。師に会つてたづねるべし。

百合が使われているのは13作。そのうち3作を紹介する。第42図は再掲載となるが、太い松の幹と晒木に百合と杜若が添い出ている。第43図は百合、菊、檜扇が太い晒木と共に立てられている。どちらにも晒木が使われて、山間の草地で咲く花の風情をよく捉えている。第44図、45図は床脇の棚の上下2作で、棚の上の胴束と呼ばれる小型で横長の立花に百合が使われている。棚の下のどっしりとした株分け砂物には杜若がいけられている。棚の下に杜若、上に百

合という配置は、麓の水辺から山中へと続く景色の移り変わりを感ぜさせる。

百合の蕊は取るように書かれているが、現在ではきるだけ残して自然を損なわないようにしている。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三巻 立華時勢粧』

『花道古書集成 第一期第一巻』

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』

第四十四図(上)

胴つか(胴束) 檜除真

知休

檜 松 百合 檉木 夏はぜ 著我

第四十五図(下)

二株砂物 松真

中川常意

松 檜 苔木 伊吹 晒木 杜若 柘榴

熊笹 小菊 著我





下がる上がる

△ 9頁の花▽ 仙溪

花材 垂柳繪葉すいりゅうえいば (檜科)

岡虎の尾おかとらのお (桜草科)

花器 銅花器

花展に出品した生花をいけ直した
もの。花展ではトリカブトを覗かせ
ていたが、オカトラノオに変えたら
随分良くなった。スイリユウヒバは
糸状の葉が枝垂れるので、勢いよく
登る姿の花の方が相性がいいよう
だ。下がる物には上がる物を。

横から見た奥行き



永観堂禅林寺 新法主晋山式しんぽんしき
10月14日、永観堂での晋山式に立
花一対を納めさせて頂きました。





穂に穂

△10頁の花▽ 櫻子

花材 ベルグラスモール(稲科?)

栗(イネ科)

木苺(薔薇科)

花器 陶水盤(柳原睦夫作)

稲、栗、黍、蜀黍に薄、洋種のパ
ニカムなど、秋には穂をいけること
が多い。2種類の穂を立ててみると
これが意外に面白い。紅葉したキイ
チゴを足元にいけると、穂が主役の
いけばなになった。色んな穂の組み
合わせで秋を楽しもう。



横から見た奥行き

広がりと集まり

△11頁の花▽ 仙溪

花材 錦木(錦木科)

スプレー菊(菊科)

花器 陶花瓶(市川博二作)



横から見た奥行き



ニシキギの葉が緑色から赤色へ染まっている。敢えて面で見せて扇状に広げたところに深い赤色のキクを集めて挿した。ニシキギの葉が俯かないように気をつける。

プリンスホテル会員誌 エスコート

グランドプリンスホテル京都でのいけばな体験を紹介。宿泊客がお茶とお花を体験できる。普通なら習えない先生の指導を受けられる贅沢な企画なので、是非問い合わせを。



レモンだより

健一郎&レモン。2人は仲良し。





家庭画報 11月号

桑原櫻子が廣誠院の幻の京焼きを紹介。



横から見た奥行き

シダレソリダコ

△12頁の花▽ 櫻子

花材 秋明菊(金鳳花科)

枝垂れソリダコ(菊科)

丸葉の木(満作科)

花器 手付竹籠

はじめていけるシダレソリダコは
まるで打ち上げ花火のようだ。広
がる黄色い小花の間を真っ直ぐにシ
ュウメイギクが昇って行く。秋草たち
の競演。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019年
11月号
No.677

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





かぼちやのかたち

△2頁の花▽ 櫻子

花材 木苺(薔薇科)

花茄子(茄子科)

透し百合(百合科)

花器 陶花器

ナスやトウガラシの仲間には花ナスや花トウガラシとして、昔からいけばなの花材に使われてきた。

暑くて枝ものない時に代りとして使う事もあったが、葉がついていないので、中々きれいに見せるのは難しく、苦手な花材だ。

かぼちや型の平たいかたちの実が枝に並ぶ。観賞用のナス科の品種でソラナム・パンプキンと呼ばれる。ナスとトマトが混ざったような感じ。食べても美味しくないらしい。大学の講義でいけてみた(時々講師としてお呼びがかかる)。キイチゴの紅葉した葉を添えると瑞々しく、秋らしい花になる。面白いかたちが学生達にも喜ばれた。

横から見た奥行き





出逢い花 (35)

仙溪

白山吹 (薔薇科)
しろやまぶき
どうだんつじ
 満天星 (躑躅科)

花器 陶花瓶 (清水美菜子作)

どちらも枝一本ずつでいける。ドウダンツツジは立派な枝の脇に出た小枝を切ってもらった。日頃から花屋と親しくしておく、こういう時に無理を聞いてもらえる。紅いドウダンツツジのなりに鮮やかな黄色の葉が見えた。シロヤマブキの黄葉である。枝先に黒い実が光っている。これら二つを手にとってみる。すでに出逢い花ができていた。

シロヤマブキはバラ科シロヤマブキ属の落葉低木。葉が対生するのでヤマブキ属のヤマブキと見分けがつく(ヤマブキは互生)。またヤマブキの実は暗褐色になり、ヤエヤマブキには実がならないと覚えておこう。

横から見た奥行き





妖怪礼賛

△4頁の花▽ 健一郎

花材

早蓮木 (沼水木科)
杜鵑草 (百合科)

スプレー菊 (菊科)

花器 手付籠

小学校四年生の頃にマンション住まいの母の元を離れ、六角の家で暮らしている。昔ながらの日本家屋なため、マンションでは感じ得ない何かを強く感じる。特に夜に強く感じる事が多い。その正体の一つに影というものがある。影は幼い頃の私によく畏怖の念を抱かせた。ただ怖いだけでは無く不気味だが興味を持たせられるアレである。

影は正確に間違うことなくシルエットを切り取る。普段目にしてる物でも、影を見ると本当にその物なのかと見紛えたかと感じるほどに、刻一刻と多彩な表情をしている。光が当たっていないだけの世界の魅力は底が知れない。陽が沈んで電燈が消えると全く違った表情を見せる。昼間と同じ家だとはとても思えない。妖怪や幽鬼やを想像する事ができたのは神秘とも言えるべき闇と向き合っていたからであろう。明かりを灯した途端に妖怪は何処かへと消えてしまふ。

京都に限らずだが、夜道を歩くと

多くの人が、自分の顔を照らしながら歩いている。高速で光が往来し、街灯が影を消している。これらによって引き起こされる、妖怪の住む世界の縮小は、これからの世代の人にとって、想像力の貧困に繋がってしまうかも知れない。まるで分らない事があってはならないかの様に光をあて影を取り除く行為は、次第にグレイゾーンをも無くしていく。幾ら考えても分からず、答えが出ない喜びはこれから時代を追うことに無くなっていく。○でも×でも無い△が正解かも知れないのに…。

自分の力を越えた物に感じる怯えと美が密接な関わりを持つ事を実感しつつある。そこに一縷の怯えがあることは確かだが、畏怖の念と美しいという感情には共通する所が多いのでは無いかと考えている。

同じ花を生けたとしても自分が花のことを分かったつもりで生けている作品は程度が知れている。そこに複雑性がなく、ミステリアスな空気を纏っていないからだ。理解できてしまっただけはいけない。慢心せず、奢らずに少しでも歩み寄るのがいい。魅力的なグレイを引き出せる華道家がいてもいい。

烏瓜の実

〈表紙の花〉 仙溪

花材 雪柳(薔薇科)

桐(松科)

烏瓜(瓜科)

花器 陶花器(市川博一作)

今年もカラスウリの実をいただいた。青い葉がついた状態で蔓を束ね切り口に水を当てる一本ずつビニール袋に入れてある。庭の柿の木と楓にからみつくそうだが、蔓を切らないように解くのは大変だろう。

いただいたカラスウリはまず適当な木の枝を支えにして投入で楽しんで。半日は葉も瑞々しいが、翌日にはカリカリになっているので何か葉の繁った枝を加えたりしている。

写真は枯葉を取り去ったカラスウリの蔓をツガの枝にひっかけて実をぶら下げ、紅葉したユキヤナギだけを加えて、シンプルに赤い実を目立たせた。

古く唐から伝来した朱墨「唐朱」の原料鉱石が朱赤色で卵形のものもあり、それに似るので唐朱瓜。やがて烏瓜に。



肉◎キノコ×

健一郎

私は肉が好きでキノコが嫌い。特に好きな肉は牛肉で特に嫌いなキノコはシイタケ。祖父と倉敷国際ホテルで2人で食べた300グラムのステーキが1番のお気に入り。給食で昼休みの終わりまで食べさせられたシイタケは大のニガテ。私の特技のうちの1つに物事の合理化というものがある。自分に対して都合よく物事を捉える能力だ。

好きなものだけを食べ、嫌いなものは食べない。毎日食べる食事の時間を心の底から楽しむ。好きなものだけ食べて生きている。

食へのこだわりは祖父の影響も強いが、副家元の影響が大きい。数日に一度自分の好きな食材を買い溜め、毎日好きなものを作る。自分の好きな味をこさえられる事がすごいと素直に思う。あくなき食欲が彼女を動かしている。本人がよく言っているが飽きっぽいので、嫌でもおかずのレパートリーが増えるそう。日本、中国はもちろん、ハンガリー、フランス、ロシア、ベトナム、スペイン、ジョージアなど底が知れない。数あるレシピの中にも美味しい物と格別に美味しいものに分類される。格別に美味しい料理はレギュラー入りとなり、二ヶ月に一度ぐら

いのペースで頂ける。彼女の料理の凄さは豪華で派手な食事だと小さい頃に感じていた私だが、基本の料理のレベルが尋常ではないのだ。キッチン、おからなどの一品料理が本当に美味しい。

好きなものだけを食べてきた私には、偏った持論がある。好きなものは一番好きな人が食べれば良いというものだ。例えば、家族で困んだテーブルの大皿にお肉が一切れ余ったとする。その肉の事が一番好きな人が食べれば良いという考え方だ。自分が一切れ余った肉を食べたいがための合理化なのは認めるが、実際に食べられる側からするとまだ一番マシなのかなとも思っている。

これでも食べ物への敬意、感謝はしようとはしている。嫌いなものを目を閉じて食べたり、鼻を摘んで食べるのは食べ物に対する失礼な態度だとはとらない。鼻を摘んで食べる行為がその後その食べ物が好きになるためのキッカケ作りである事は理解しているが、自分が興味を持った上で持ちうる全ての感覚を使つて堪能する事が命として向き合う最低限の礼節ではないかと考えている。満たされきつた飽食の時代だからこそ一つ一つの命と丁寧に向き合っていきたい。

もう一つだけ向きあって欲しい問

題がある。食べた物で体は形成されているという事実だ。何をあたり前のことを言い出したのかと驚ろかれる事があるのだが、実感できているかは別の話だ。私は個人的に自分の体が嫌いな物ではなく好きな物で出ていて欲しいと願っている。かく言う私も実感は出来ていないと思うが、訳の分からないような物で自分が存在しているという事が怖くて、奇妙なものは出来る限り避けている。

テレビか何かで見た映像が衝撃的で頭から離れない。忙しそうな男性が移動時間を使ってレトルトのカレーをストローを使って食事をしているシーンだった。私の目には食事をしていくためのエネルギーをチャージしている生命活動の維持のための行為にしか見えず、とても食事を楽しんでいっているように見えなかった。ここ100年ほどで、人間が楽しむための娯楽が一気に増えた。食事ははじめとする基本的な欲求が蔑ろにされつつあるのではないかと感じている。人それぞれが求める形がいくら増えようとも、基本的な欲求の質が高い生活を行える事に重きを置くだけで毎日の生活のクオリティが上がることは間違いない。

NHK WORLD JAPAN

CORE KYOTO

The Modern Flower

放映 10月10日 海外にて放送

※インターネットのオンデマンドでご覧いただけます。
(無料)QRコード↓



内容 京都の現代「花」事情。

「華包」^{はなづつみ} 芦田一春 大津智永 他

「花遊び」 桑原櫻子 桑原健一郎

「花結い」 花結い師タカヤ

「いけこみ」 花政 藤田修作 福山重文

※この内、桑原家の部分について紹介します。

桑原専慶流は300年以上の歴史があり、家元の家の各部屋には、普段から花がいけられている。花の世話は副家元の櫻子の役目だ。



Sakurako Kuwahara
Vice Iemoto, Kuwahara Senkei school



Each day I change their water and trim their stems.



Kenichiro Kuwahara
Iemoto-designate

櫻子「花は生き物なので、花がいけてないと寂しいんです。毎日水を換えて、少し足元を切り直して置いてあげると、又元気がなって咲いてくれる。その元気を私達家族も貰いながら毎日生活してるわけで、花が無い時というのは、ほとんどこの家ではあり得ないです。」

甥の健一郎は自分の世代で分かち合えるいけばなのスタイルを模索している。彼は生徒達にアートを楽しんでほしいと願っている。



生徒さん「健一郎さんの教え方は、花を楽しむように語るんです」

生徒さん「敷居の高さを感じさせないよう先生がお声がけて下さるのが、この教室の特徴と魅力だと思っています」

健一郎「伝統を守るだけでも凄く意味のあることと思っています。けれども僕はお花が好きで、どんどんやっていく内にそれだけでなく、自分のお花というものを探し始めているんです。」



若い未来のリーダーは教室に留まらず、ソーシャルメディアに作品を投稿している。

投稿作品の紹介

- ・多肉植物と地層と折り紙の恐竜たち
- ・桜の枝にとまる二羽の鳥のロマンス
- ・ガイコツとコウモリでハロウィンに

健一郎の新しい試みは伝統的ないけばなに、楽しい遊びの要素を加えること。



健「僕が3歳の頃から、祖母が出している本なんですけど、小さい写真集がございまして僕の原点でもあります。」

『ホッホチャンとケンチャン』の作品紹介

- ・子供用ブーツにバラ
- ・折り紙シュリケンとスイートピー
- ・てるてる坊主と柳とガーベラ
- ・ニッコリ手袋とアネモネと枝垂れ柳

祖母の素子さんが孫の健一郎と一緒にちやや人形を使った「花遊び」を写真に撮り、



祖父が文章を添えて本を出版。

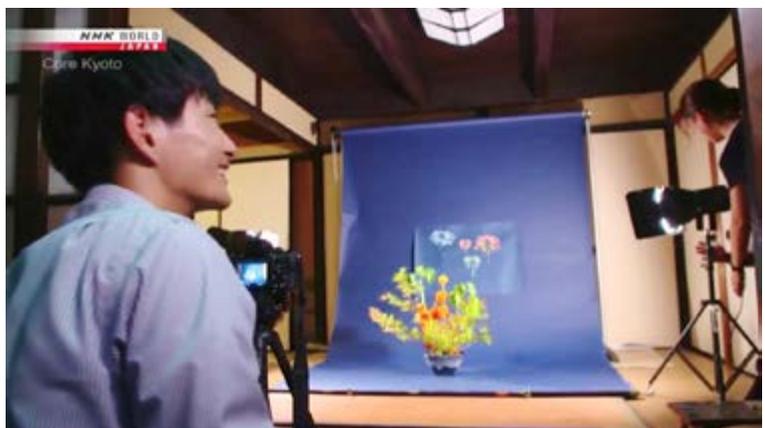
『ホッホチャンとケンチャン』は彼が花に親しむきっかけとなった。

祖母に触発された彼は今、いけばなの喜びを広めようと懸命だ。

新しい作品を撮影する健一郎。

- ・切り絵の花火にホオズキと楓
- ・真夏の花火の思い出にいけばなを重ねる。

作品の前に、櫻子副家元と話す健一郎。若い華道家は時折受けるきびしい批評を糧



にして、新たな挑戦を続けている。

NHK WORLD JAPAN
Core Kyoto
"The Modern Flower"

Produced by NHK 2019
in association with
NHK PLANNET and in
cooperation with
J WORKS

立花時勢粧の器

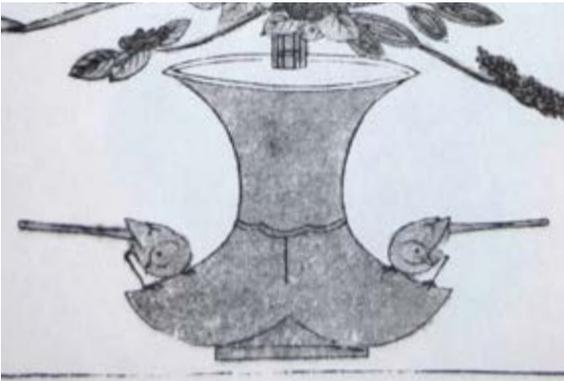
「立花時勢粧」には118の図が収められているが、その器は96種類もある。出版された元禄元年頃には、華やかな世相と立花の流行とが相まって、立花瓶にも様々な形や新しい意匠をこらしたものが作られた。

自由奔放な自然の息吹とその調和を表現しようとした富春軒仙溪。特に行や草の立花には、それに呼応するような変化に富んだ器を選んで使っている。

器の形だけを見ても様々な形態のものがあるが、立花瓶の遊びの部分として「耳」に注目してみよう。

- 図① 蝸螂 かまきり
- 図② 魚
- 図③ 象
- 図④ 鳥
- 図⑤ 兔 うさぎ
- 図⑥ 蝶 ちよう

これらの意匠に釣り合う躍動感が花形にも求められることになるが、どんな花かは、それぞれの図で確かめていただきたい。



第六十六図 テキスト No.655



第七図 テキスト No.613・648 (に掲載)



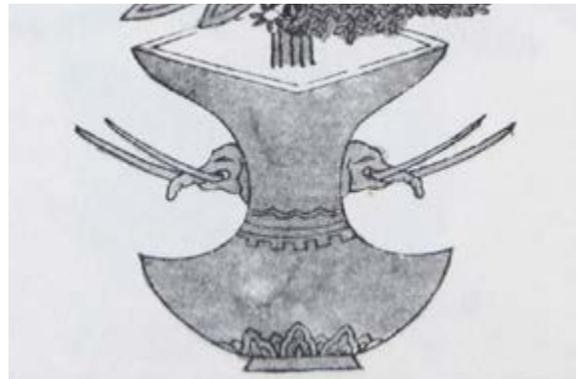
第七十図 テキスト No.674



第二十五図 テキスト No.647



第八十七図 テキスト No.654



第五十七図 テキスト No.673

第52回 日本いけばな芸術展

会期 10月1日(火)～8日(火)

会場 東京日本橋高島屋

出品

4次展10月7日(月)～8日(火)

桑原仙溪 佐藤慶由

除真立花のきしんりつつか

花材

松(松科)
山帰来(猿捕次科)
蓮華躑躅(躑躅科)
満天星(躑躅科)
柘(柘科)

花器

貝塚伊吹(檜科)
寿松(松科)
鶏頭(莧科)
小菊(菊科)
銅立花瓶

盛花

花材

梅擬(繡の木科)
満天星(躑躅科)
糸菊(菊科)
杜鵑草(百合科)
羊歯(羊歯類)

花器

古染付水盤





山芍薬の実

^ 10頁の花 ^ 櫻子

花材 山芍薬 (牡丹科)

糸菊 (菊科)
蓼 (蓼科)

花器 手付通草籠

ヤマシヤクヤクの学名は「ピオニア・ジャポニカ」でボタン科のポタン属。初夏の頃、透き通るような繊細な花を一輪だけ咲かせる。洋芍薬とは違い中々出会う事の出来ない貴重な花だ。器も取り合わせも特別なものを考えてあげないと綺麗に咲いてくれないような気がする。場所によつては絶滅危惧種にもなつていて、咲くのに6年もかかるので、育てている方は大変な事だ。その清楚な花からは想像も出来ないような派手な実。初秋には実が熟して結実しない赤色と結実した濃紺色の種子になる。

今年は何荷する数も少なく大切な一本となった。一輪菊とタデの花と籠花に。





雪柳と水仙

△11頁の花▽ 仙溪

花形 生花 株分け
 花材 主株 雪柳(薔薇科)
 子株 水仙(彼岸花科)
 花器 陶水盤

秋の菊と冬の水仙。どちらも、多くの植物が葉を落とし、地上から姿をいったん消してしまふ淋しい時期に花を咲かせてくれる。菊の季節、水仙の季節を心待ちにして、今年も楽しませてもらえることに感謝したい。

水仙の生花は一種でいけて凛とした姿にするも良し、他の花や木と株分けにしてもいい。水仙は11月から2月初旬までいけられるので、取り合わせも色々楽しめる。雪柳の紅葉との対比が美しい。

レモンだより

お床を拝見中。

花：酸漿 アナベル 檜扇の実

額：版画 リンゴと少女(柳本史)





鎌柄の生花

△12頁の花▽ 健一郎

花材 鎌柄(薔薇科)

花器 煤竹竹筒

鎌柄は非常に堅く、鎌の柄に使われたことからカマツカと名付けられた。別名のウシゴロシは、この材で牛の鼻木を作ったためとする説などがある。生け花で用いるときは実と葉のバランスをとるの気を付けると良い。どうしても実のつき方によつては、間の抜けた作品に仕上がってしまう反面、伸び伸びとした花に仕上げると独特の生花になった。熟した赤い実。まだ黄葉する前の葉。日照時間が短くなってきたなと実感する一つの要因でもある。紅葉の姿を見て、一緒に耐え抜いた暑さを懐かしむ。そして自分がクーラーのついた部屋に居たことをイカサマ呼ばわりされる。「あなたは夏を経てまっくろに日焼けしていないのね」と。これから始まる厳しい冬に備えてストープの用意はもうしてある。

横から見た奥行き



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2020年
11月号
No.689

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





タカサゴユリの実

△2頁の花▽ 健一郎

花材 梅花躑躅(躑躅科)

高砂百合の実(百合科)

鶏頭2色(苺科)

花器 陶花瓶

高砂百合は種子を多くつけ、風に運ばれて広がっていく。高速道路で高知の牧野植物園へ行った際に、大勢で私を迎え入れてくれた。

花の季節が終わると実になり、意識しなければ見つける事ができないが、ふとした時に道端でも出会う事がある。

花を終えた実と、葉の役割を終えた梅花躑躅に、盛りの鶏頭がよく映る。



タカサゴユリの花

出典：<https://ユリ.net/ユリ-品種/タカサゴユリとは？.html>





シロシキブの実

△ 3頁の花▽ 桜子

花材 白実小紫

しろみこのむらさき
(熊葛科・紫蘇科)

杜鵑草 (百日科)

ほととぎす
水引草 (藜科)

花器 手付籠

小さな白い実が美しい。

シロシキブと呼んでいるが、シロミノコムラサキが正確な名前らしい。繊細な枝に沢山の実ができてい

る。白花のホトトギスを加えると、白い実と白い花が白さを競い合っているようにも、互いに助け合い讃え合っているようにも見える。

赤い花のミスヒキソウが優しく寄り添う。



シロミノコムラサキの花
出典：https://www.ootk.net/cgi/shikihtml/shiki_818.htm





ツルウメモドキの花。雌花⑥、と雄花⑦
 出典：https://plaza.rakuten.co.jp/okada1952/diary/201505120000/

ツルウメモドキの実

△4頁の花▽ 仙溪

花材 蔓梅擬 (錦木科)
ツルウメモドキ

糸菊 (菊科)
シロバナアゲハ

上臈杜鵑草 (百合科)
 花器 陶花瓶 (市川博一作)

つけた後でも刻々と変化する実も
 の花材がある。ヒオウギやツルウメ
 モドキの実は、しばらくすると弾け
 て中から艶やかな種子が顔を出す
 が、その自然の色のなんと美しいこ
 とか。

ツルウメモドキとシヨウロウホト
 トギスの鮮やかな出会い。



ローゼルの実

△ 5頁の花 ▽ 仙溪

花材 ローゼル（葵科）

菊2種（菊科）

花器 陶花器

ローゼルは赤い大きな蕾（つぼみ）に見えるが、中には既に実ができています。珍しく枝先に葉と小さな蕾が残っていたので、多めに買い求めて秋色の菊を合わせていけてみた。葉の水揚げも良いので、今後も葉付きで出てるのを期待している。

今月号の実物花材には花の写真添えている。意外と知らない花の姿花を見てから実を見ると、実もの花材への愛着が増してくる。それぞれに個性的で貴重な実たちと出逢える楽しみ。秋のいけばなの醍醐味。



ローゼルの花

出典：<https://www.toukagen.com/?pid=126322305>





キミズミの実

△6頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 副流し
 花材 黄実酸実の実 (薔薇科)
 花器 陶花瓶

(2009年11月号より)

以前、ウラジロノキの実として白黒写真で掲載したもの。いけた後すこし橙色に色づいてきたと書いているが、ウラジロノキの実は赤く熟すので、もともと黄色く熟すキミズミだったかもしれない。確信はないが今回はキミズミとしておく。

キミズミはリンゴ属。ウラジロノキはアズキナシ属。似た実のできる木は他にも色々ある。



ウラジロノキの花

出典：<http://hanasan.dreamlog.jp/archives/52106298.html>



キミズミの花

出典：<http://www.okadanouen.com/zukan/kimizumi.html>



タマミズキの実

△7頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 副流し
 花材 玉水木の実(鶯の木科)
 花器 陶花瓶(清水保孝作)

(2012年11月号より)

タマミズキはウメモドキと同じモチノキ科の落葉樹で、静岡から南西諸島に分布する高木である。

ウメモドキより小さな実は、ややくすんだ赤色。

直立した幹から横枝が階段状に出て広がる樹形がミズキに似るがミズキの仲間ではない。

雌雄異株(雌木と雄木がある)なので両方の花の写真を載せておく。モチノキ科には雌雄異株の木が多いが、中には雌木だけでも結実するものもあるようだ。



タマミズキの花。雌花⑥、と雄花⑦。

出典：<https://matsue-hana.com/hana/tamamizuki.html>

出典：<https://www.digital-museum.hiroshima-u.ac.jp/~main/index.php/> タマミズキ



立花

△ 8頁の花 ▽ 健一郎

花型 直真立花
すくしんりつか
花材 薄(稻科)
すまき

糸菊(菊科)

吾亦紅(薔薇科)

丸葉の木(満作科)

山芍薬の実(牡丹科)

杜鵑草(百合科)

葉菊(菊科)

竜胆2色(竜胆科)

二輪菊(菊科)

梅花躑躅(躑躅科)

檜扇の実(菖蒲科)

花器 陶花瓶

野の花の種類が一番多い恵まれて
いる時だった。この秋を立花にふん
だんに詰め込んだ。

枝物は丸葉の木と梅花躑躅のみで
あるが、草花に説得力が出ている。
翌日に薄の葉は巻いてしまった為
生け替えながら楽しんでる。

横から見た奥行き



石榴ざくろ

〈表紙の花〉 櫻子

花材 石榴の実(稔秋萩)

菊(菊科)
数寄草(刺草科)

花器 陶花瓶

倉敷の叔母宅にてザクロの実を採らせていただいた。今年は沢山実がなつたので、持って帰っても良いとの事。お弟子さんに手伝ってもらい艶々つやつやの真っ赤な実が付いた重たい枝を切り落とした。大切に持ち帰って、花火の様に咲くキク、花が密に咲くヤブマオと取り合わせた。思いがけない花にも出会えて、心に残る1作。



ザクロの蕾と花と花のあと



ザクロの花

出典：<https://mirusiru.jp/nature/flower/zakuro>



『溶ける』

健一郎

自分と人との境界が溶けてなくなっていく。私はこの世界の一部ではない。全てが渾然こんぜん一体と化している。

桜とバードウォッチング。鳥の元気に振り回される。

水中を泳ぐ。自分と水の境界が曖昧。夏の砂浜。じりじり太陽を受ける。

苔でゴロゴロ。ここから動けない。岩にびったり。何故か落ち着く。

山頂にて瞑想。自分を無くしていく。雨でびしょびしょ。傘は置いてきた。空から落ちる。体が無くなつたよう。雪中に溺れる。身体からだの熱をとられ私もひんやり。

花を生ける。花とおしゃべり。

頭を使って物を感じ取ろうとする行為は難しい。何も考えず、身体を放つぱり出す方が、想像を超える体験が可能である。

大自然はどう感じているか分からないが少なくとも私は相手と溶け込むことができる。

花と話しながら花を生けるのは楽しいが、感覚を研ぎ澄ましていくと花と一体になる事ができるのである。

うか。それには大自然に溶ける練習がもう少し必要であると考えている。今の自然の一部である切り花に溶け込むようになるには、今感じている「溶ける」と言う感覚を研ぐ必

要がある。単純なものほど自分を溶かし難い。頭でわかっつてしまい、言葉に出来てしまうからだ。言葉を越えた雄大さを花から感じなければいけない。

私は自宅の庭を眺めることはできても、まだ、溶け込むことはできない。何かに夢中になった時、自分への意識が消え、自分でなくなる。

少しでも自分がのこっていると、対象物の全てを感じられない。感じるとは、私を通して伝えられる感覚ではあるのだが、できるだけそのままのそれを私で感じていたい。自分を無くしただけ何かが入ってくる。

音楽に体をゆらす。不快と快の間を彷徨さまようヴァイオリンの音、身体を解放する

と、苦手な音が無くなつていく。心臓に直接響くバスドラム。バスドラムで心臓が動いているのかと感じる。

「閑しずさや 岩に染み入る 蝉せみの声」 芭蕉の有名な句である。蝉せみの声を聞き、蝉せみを見たわけでもなく、本人がそこにいるだけでもない。主題がぼかされているのである。閑しずさが主題なわけでもなく、岩も、蝉せみの

声も主題ではない。その空

間を詠んだ句だと認識している。つまり、そこに自分は存在しているようである。自分が溶け込んだ状態と考えることもできるのかもしれない。

芭蕉は全国各地を歩き回り、その地、その地にて自分を溶かし歩いたのではないかと妄想も広がる。

だが、芭蕉はスカイダイビングもスキューバダイビングもしていない。日本から外には出たことすらない。

私は今生きているこの時代を感じたい。世界と私の輪郭線をボカしていったらなと考えている。



但馬で日帰りでのスカイダイビング

インドボダイジュ

学名：Ficus religiosa

英名：bodhi tree pippala tree

クワ科・イチジク属の高木。樹皮や根皮などを薬用とする。



信仰を集める樹齢140年のインドボダイジュ。ブッダガヤのマハボダイ寺院。

出典：<https://tricycle.org/magazine/bodhi-tree-tlc/>



出典：<https://china.desertcart.com/products/139063302-pmw-peepal-tree-fruit-powder-sacred-fig-raavi-100-goose-packed-loose-pa>



出典：<https://astrotalk.com/astrology-blog/why-is-peepal-tree-worshipped/>



サンチー遺跡のレリーフ。紀元前3世紀にアショーカ王がブッダガヤに建てた寺院とボダイジュ。西暦1世紀。

出典：https://www.wikiwand.com/en/Bodhi_Tree

仏陀ゆかりの三聖樹

仙溪

インドの聖樹（聖木）にはどのような木があるのだろうか。仏教とゆかりのある木について見てみよう。お釈迦様の生涯と深く関わりのある木は次の3つ。

菩提樹
インドボダイジュ
沙羅双樹
サラノキ
無憂樹
ムコウジュ

釈迦は長い遍歴と苦行の末に、ウ

ルヴェーラ村（今のブッダガヤ）で一本のインドボダイジュの下に座し、49日間瞑想して真の悟り「菩提」を得た。

太古よりインドボダイジュは大切な樹木であったようだ。インダス文明の遺跡から、その葉が描かれた陶器が見つかっている。葉、樹皮、根に様々な薬効があり、ヒンズーの主要な三神が棲む木でもある。

インドの国樹になっているくらい大切な木なのだ。クワ科イチジク属の高木で、花は見ることができず、枝に直接小さな

実ができる。ハート型の葉が風にパタパタと揺れる音がなんとも心地よいそうだが、釈迦もそんな音を聞きながら瞑想していたのだろうか。

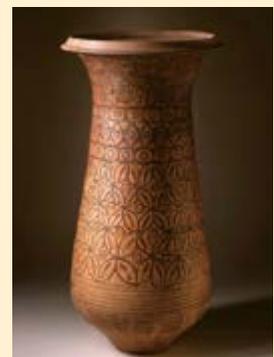
中国、日本でこの木は育たない。代わりにシナノキ科のボダイジュが寺院に植えられている。こちらは中国原産の落葉高木で、日本には栄西禅師が宋から種子を持ち帰った。

釈迦は45年の間、数百キロの道を何度も行き来して説法を続け、80歳で亡くなる。終焉の地、クシナガラ川辺にある2本のサラノキの下で



儀式で使用された陶器のハート型の葉模様。B.C.2600-2450。

出典：https://ja.wikipedia.org/wiki/インダス文明#/media/ファイル:Ceremonial_Vessel_LACMA_AC1997.93.1.jpg





①と⑥④ 出典：<https://www.yamakei-online.com/yama-ya/detail.php?id=677>



涅槃。ガンダーラ、ロリヤン・タンガイ遺跡。2～3世紀。インド博物館（カルカッタ）。

出典：https://www.pinterest.jp/pin/389772542744921786/?mic_v2=1a2b00xf1

サラノキ

学名：Shorea robusta
英名：Sal tree
フタバガキ科・サラノキ属の高木。3月頃、葉の生え替わりと共に、淡いクリーム色の小さな5弁花が無数に咲く。花には芳香がある。



出典：<http://www.flowersofindia.net/catalog/slides/Sal.html>

釈迦が息を引き取ると、サラノキは時ならぬ花を満開に咲かせ、釈迦の体の上にその花を降り注いだという。サラノキはフタバガキ科の高木で、材は堅くて耐久性があり、様々に利用されている。落ち葉は草の茎で綴り合わせて丸い葉皿として使われる。

幹から採れる樹脂（ドゥーナ）は様々に利用され、燃やして出る良い匂いの煙は病原菌を殺して辺りを浄化するといわれている。そして春に咲く花にも芳香がある。釈迦がこの木の下を選んだのもなんとなくわかる気がする。



出典：<https://explorepharma.files.wordpress.com/2010/10/ashokajpg>



釈迦誕生。ガンダーラ、ロリヤン・タンガイ出土。2～3世紀。インド博物館。

出典：https://www.pinterest.cl/pin/AX0815eKMSm7yu8uWT-JzMV1xyS8-Mt049tKRfOXzzWLUXoRwCOLJs/?mic_v2=1a2b00xf1

ムユウジュ

学名：Saraca asoca
英名：Asoka tree, Sorrowless tree
マメ科・ムユウジュ属。細長い葉の常緑小高木。3月頃に美しいオレンジ色の花（萼）が咲く。



出典：<http://medicinplants.blogspot.com/2008/08/ashoka-tree-sorrowless-tree.html>

日本ではツバキ科のナツツバキやヒメシヤラが沙羅双樹として植えられている。ムユウジュはインドでアショカと呼ばれるが、「ア（無い）」「シヨールカ（悲しみ）」から無憂樹の字が当てられた。釈迦の母マーヤーがルンビニーの園でこの木をつかもうとしたときに、右脇から男の子（のちの釈迦）が生まれたとされる。

伝承によると誕生してすぐに七歩あゆみ、自ら偉大なることを獅子吼し、温冷二水によって身を清められた（灌水）とあり、その様子はのちに石に彫られ、仏伝のワンシーンとして今に伝わる。ムユウジュはマメ科の常緑小高木で、春の暖かさを象徴するような黄色から赤色の花を咲かせる。釈迦が世に現れる場所にふさわしい、優しい葉と温かな花色を備えている。



ヤマシャクヤクの実

健一郎

花型 生花
花材 ヤマシャクヤクの実(牡丹科)
山芍薬の実
花器 陶花器

一度見たら忘れることのできないインパクトを持つ山芍薬。山芍薬独特の赤と深い紺色が何とも愛らし

い。
盛花や投げ入れで生ける事はあっても一種で生花にする事は珍しい。菊と株分けで生ける予定だったが、山芍薬のはちきれんばかりの個性を中和させることがもったいなく感じた。

不恰好で土味を感じさせる器に山芍薬の個性があっている。葉が綺麗な状態で残っていることは珍しく、真の葉はあえて一つも落とさずに生けた。留にもう少し葉があればと思うが自然に対して自分が何をできるわけでもなく、ありのままに生けた。



ヤマシャクヤクの花

出典：<https://akagishizenen.jp/blog/> ヤマシャクヤクが見ごろです！ /

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021 年
11 月号
No. 701

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





立花時勢粧333年

記念挿花 〆1〆5、12頁〆

会期 9月18日(出)〆20日(月)〆(祝)

会場 鹿王院

插花 桑原仙溪 桑原櫻子

桑原健一郎

シンククロするアート

鹿王院の座敷、日本画家・藤井隆也氏の枯葉の襖絵に囲まれて、藤井氏の屏風の前に花をいける。へんに緊張せず不思議なほど心地よかった。襖絵の枯葉が優しく花を見守ってくれているような感覚。藤井氏がつくる独自の世界にいけばなが呼応する。花とシンククロするアート。

舞う 鹿王院本玄関

〆表紙の花〆 仙溪

花材 グロリオサ(百合科)

鶏頭(寛科)

花器 陶花器 竹内眞三郎作

屏風 藤井隆也作

グロリオサも鶏頭も天竺(インド)ゆかりの植物なので、古刹にいけると何か意味ありげだ。グロリオサの蕾の形が屏風の絵と響き合う。緑陰の小径の先で、赤い花と黒い華が舞い踊る。



キラキラ 鹿王院客殿

△2頁の花▽ 櫻子

花材 鍾馗水仙(彼岸花科)

龍胆(龍胆科)

男郎花(女郎花科)

花器 陶水盤 近藤豊作

屏風 藤井隆也作

無数の光の輪のようなこの屏風の色に合わせて、黄色と赤紫の花をいけ、絵と一体となるように白い花を加えた。水面にも敷板にも屏風の絵が映っている。花がキラキラ光って見えた。

命を視る 鹿王院客殿

△3頁の花▽ 健一郎

花材 通草(通草科)

二輪菊 嵯峨菊(菊科)

桔梗2色(桔梗科)

花器 掛分釉花器 清水保孝作

屏風 藤井隆也作

この屏風を目にした時何故か細胞を意識してしまった。細胞まで見ることはできないが、花の細部までに気を使って花を生けることができたらなと思わされた。

5種それぞれの輝きが調和するようにいけた。



米木の立花

鹿王院草駄天像前

△4頁の花▽ 仙溪

花型 除真立花

花材 米木(松科)

霧島躑躅(躑躅科)
晒木

花器 遊環耳銅立花瓶

後ろに居られる草駄天様は俊足で僧坊の守護をされている。遙か遠くの深山の樹を立て、供養させていただいた。

深山砂物 鹿王院茶室

△5頁の花▽ 仙溪

花型 砂の物

花材 錦木(錦木科)

天南星(里芋科)

甘野老(百合科)

笹竜胆(竜胆科)

藤袴(菊科)

白花杜鵑草(百合科)

下野(薔薇科)

紅羊歯(雄羊歯科)

花器 銅砂鉢

掛物 藤井隆也作

普段非公開の大河内傳次郎寄進の茶室。珍しい実や一足早い紅葉を床の間に。もてなしの花。



㊦ 緑陰の小径の奥で出迎える屏風絵といけばな
 ㊧ 昨秋奉納された木の葉の襖絵（56面）の1つ

THE KYOTO

襖絵に走る葉脈

古刹・鹿王院

現代美術作家の創造

会員制の文化情報発信サイト

に、藤井隆也氏の襖

絵への思いが紹介

されています。是非

ご覧下さい。↓





行李柳

△6頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 副流し
花材 行李柳(柳科)
花器 煤竹竹筒

行李柳の生花は櫛くしでといったようにというのが理想だが、途中で枝分かれしたものを混ぜながらその姿を生かすなら、多少の枝の交差には目をつむり枝が持つている勢いを表現したい。



晩秋の立花

△7頁の花▽ 仙溪

花型 除真立花
花材 柊(木犀科)



花器 陶花器

昨年の晩秋に稽古で立てた立花。テキスト1月号掲載の立花と同じ花材なので見比べてほしい。お手本として立てたもの(今回)と自由に模索しながら立てたもの(1月号)。どちらが優れているとかではなくて、立花を立てる時の姿勢としては、1月号のような自由な心でいたい。

雪柳 (薔薇科)

水仙 (彼岸花科)

鳥不止 (目木科)

椿 (椿科)

赤芽柳 (柳科)

寒菊 (菊科)

小菊 (菊科)

文阿弥花伝書

仙溪

縁あつて鹿王院で花をいけさせて頂けたので、鹿王院に伝わる『文阿弥花伝書』のことに触れておきたい。

この花伝書（3巻の巻物でおそらく後世に書き写されたもの）は供花の功德や挿法・飾り方について仮名交じり文で書かれ、所々に彩色の絵図があり、各巻末尾に綉谷庵文阿弥の名がある。

序文に、仏前の供物の中で花を最も尊いものと位置づけ、花を嗜むことで現世で楽しみ来世で救われることができると説いている。

花伝書としては最初期の内容と思われるのだが、詳しい研究がされていないのが残念。ここに序文全文を紹介する。

『大和文華第48号』掲載の釈文（読みやすく直した文）を参考にしたが、段落で区切り、仮名を漢字にするなど



文阿弥花伝書と伝わるものは滋賀の西教寺に7巻、九州国立博物館に残巻1巻、他にもあり、鹿王院のものには天承元年（1131）の日付がある。

『特別展 いけばな 歴史を彩る日本の美』図録より (2009) p42-43



鹿王院山門からの長い石畳。苔生した紅葉の林を真っ直ぐな道が続く。清浄な空気に癒やされる。

した。間違いがあればご指摘願いたい。

序曰

夫れ、この界は須弥の南瞻部州、天竺大唐日本三国之に同じ、其の中に於いて我が朝万勝たり。

先ず神国なるがゆえに仏法に近し。諸宗の元祖三国に渡るに、諸経論秘伝尤もこの国に収まるなり。されば日域に生ずる人、知恵のかしこき事万鏡を磨き、心のゆるき事四海に満つ。

しかりといえども、その身の嗜み学する事は身軀に影の応ずるがごとく、心闇々たれば影うつる事なし。玉磨かざれば光なきがごとし。たまたま請けがたき人生を請け、生まれ難き国に生ずる事有り難き宿因と思ひ、一弾指の間もいたづらに日を送る事なかれ。ここ

をわきまえざる人はなげかしきや。三界六道に輪廻し悪道に墮せしめん基なるべし。今生後生のために諸芸を嗜むべし。

しこうして仏神三宝に六種の供物あり。その中にとりわき花供尤も勝りたり。又翫ぶ事私ならず、この道に深くわけ入り、深真不思議の信号を六ちにそみ（六陳に染み？）、教えの如くに翫ぶならば、仏道修行にもここ無二無三の教行にあらざるや。

先ず躰色この理をもつてとるに、地水火風空の五躰なり。青黄赤白黒、色これに顕れ法報応の三身もこれあり。五音に五の響きまでも顕れたり。そのゆえは五躰六色具足しぬれば、すなわち三身万徳の悟りあり。これを識る事は易かるべきかな。又難かるべきかな。ただすべからく師の伝来をもつて教え

とす。

心に得たるところをもつて悟りと定むべしや。心を千またにわかち、勢を天地に馳せてこの道を心えべき事肝要なり。たとえは万木千草ごとくもつて四季折々の風情をたもつ事、釈尊の深入禅定観見法界、草木国土悉皆成仏と法華経に説きまします事も、釈尊一念の上なるべし。森羅万象有情非情の上をなべて草木国土と名をさしてのべ給うと見えたり。何事が疎かならむや。

松杉をしん（西教寺に伝わる文阿弥花伝書には「身」の字が使われている）に用うは真如実相の心と得べし。開落の花は随縁真如の道理と心得べし。又四季に変わらざる草をば不変随縁とも真如平等とも観すべし。花を翫ぶ事は仏世にたとえば釈尊一代教法には華嚴経の説と心得べし。もつとも莊嚴第一の

利益なり。花を挿げる室には諸天来迎あり、天人も影向したまうなり。

春は諸花の開落の枝をまじえ、匂ふんぶんとして袖にうつる事は、梅檀の林に入りてさながら梅檀を翫ぶにことならず。峨々たる枯れ木のこずえは鉾を立てたるがごとし。苔のひまよりみどり少々わひ出、若木をそねむに似たり。沙羅双樹のかり(殯?)に色を變ぜしがごとく。

夏はかきつばた花あやめなど水辺に咲ける趣で、すなわち涼しき事これを思うに江南の野水に戯れるがごとし。

秋は千種の花の朝露にかたぶき、己々の色をうつし、又夕時雨一通りのあとうち湿り、しどろに伏し違うを見るに、などか心を掛けざらん。

冬は山野悉くおしなべて霜雪に草木うづもれ、儂き思いにも堪えぬべきところに、傍らを見れば一もと菊の散り残り、虫の住みかの名残かと哀れなり。

又山橘、深山樞などいうものの実に色をなし、葉に水をふくみ青々明々とある事をみれば、また枯れ果てぬ世の有様と頼みあり。

めづらかに面白き事、いかなる慳貪の無常を知って、有為の転変を悟らざらんや。生老病死の理をしるべきも、尤もこの一瓶のうちに漏れんや。

道俗男女在家出家貴賤上下ともにこの花を翫びなば、当来にては心を慰み客をもてなし、来世にては仏の会場に往詣して、種々の曼荼羅に座し、種々の花を翫ぶ事疑いあるべからず。

挿げる道より悟りを開かん事決定なるべし。委才覚のおもむき、この一卷のすえに顕了す。ただ古今の師伝にまかせ、かくの如くなるべし。六賢他見あるべからず。これを秘すべし。

又曰く、花を立つ事、仏在世より今に至るまで戒定慧の三字をしめし給うその第一なり。香花火をもつて三字を示し給うと見えたり。

(このあと巻1に72、巻2に67、巻3に9の事柄が書かれている。)

仏教と花の関係

文阿弥花伝書の序文を読んでいて、「仏教」と「花」の関わりについて新鮮な発見をした。

文阿弥は「万木千草ごとくもつて四季折々の風情をたもつ」この世界

で、季節の移ろいを感じながら花を挿す行為そのものが「悟り」に繋がる崇高な「嗜み」だと力説している。

仏教の供花がいけばなの源流の1つと分かつてはいたが、それは形式だけではなくて花を挿す精神も育んでいたのだ。

仏教僧が釈迦の教えに近付こうと花を挿すうち、花も人と同じなのだと思ひ付きそれこそ釈迦の教えと悟る。花を慈しみその個性を生かすように挿した供花が自分も含めた人々の心を癒やす。そして何より花を挿すことでより良く生きるための道がひらける。日本に生まれてこんなに素晴らしいことをやらないなんてもつたらない、と文阿弥は熱く語っている。

花を尊ぶ気持ちが良いいけばなを生むのだと最近つくづく思うようになったが、彼は同じことを書き伝えてくれている。



足利義満筆「鹿王院」の額と客殿。襖絵の枯葉、屏風絵、花。それぞれが響き合い呼吸する。



鹿王院の舎利殿（現在修復中）。中に源実朝が宋から招来した仏牙舎利（釈尊の歯）を安置する多宝塔がある。

『からさわ 涸沢カールの印象』

健一郎

ナナカマドの赤色、ダケカンバの黄色、ハイマツの緑に覆われた3000メートル級の山々に囲まれた窪みへ菜月と2人で行ってきた。その場所は涸沢カールと呼ばれており、積雪が大きな氷になり重力によって流動して削られてできたくぼみだ。紅葉を見に出かけた。10月の上旬であった。

涸沢カールまで長野県の上高

地から片道を徒歩で6時間ほどで着くらしいのだが、8時間ほどかかった。道は険しい。奥上高地とも呼ばれている。

出発してすぐの上高地付近では微かに残る夏に目がいく。標高が上がるにつれ、草木の様子が変わっていく。歩が進むたびに季節が少しずつ変わっていく。それは山を歩く楽しみでもある。

北アルプスの空気を心ゆくまで吸った。山芍薬を甘くしたような匂い、湿った土の匂い、動

物の匂い、樹木が発するフィトンチッドの匂い。場所や標高が変わることでさまざまな香りを楽しんだ。中でも高い標高で森全部の匂いが内包されたかのようないはもう一度嗅ぎたいな、と下山した今も思う。山自身匂いなのだろうか。良かった。

植物のない岩をゆつくりと歩いて山小屋により、ソフトクリーム。岩の道を歩きながら木陰に座り羊羹。そして涸沢カールの小屋でビールとおでん。格

別だった。

小屋で一泊した。本格的な山登りは初めてだ。夜は寒く、いくら着込んでも寒い。外へ出ると雲で星は見えなかったが、テント泊している方達のテントが綺麗だった。することも無いので、早めに寝て起きると、日の出の時間だ。涸沢カールでの日の出は直接、日光に当たることが叶わない。涸沢カール名物はモルゲンロートを見ることができた。モルゲンロートとは、東から太陽の赤い光が山筋を照ら

し、山脈や雲が赤く染まる朝焼けのことを指し、山がもつとも美しく見える現象の一つとされている。太陽で照らされた山を背に下山をする。危なっかしくはあったが、ペースを上げ6時間で麓まで戻れた。急な道中も文句を言いながらついてきてくれた菜月には感謝している。1人でなく菜月と帰ってこれたことに大きな意味があるように思う。食べ物が血肉を作るように、見たもの感じたものが感性を作る。2人で色々なものを見て歩きたい。





①濁沢カール付近のゴヨウマツ。このように枝を伸ばしていた。 ②徳沢付近で猿をよく見かけた。キノコをとって食べて日向の程よい倒木の上に腰掛け食べていた猿が印象深い。 ③オヤマボクチ。 ④ノギク。道中に時折花が残っている。 ⑤フジバカマ。 ⑥横倒しに伸びるナナカマド。 ⑦マユミの実。 ⑧上高地、河童橋と星空。 ⑨新月の夜空に満天の星。 ⑩日の出の瞬間、山が赤く染まる。モルゲンロートと呼ばれる神秘的な光景。



花一輪

鹿王院客殿

△12頁の花▽ 仙溪

花材 蓮(すいれん)
(睡蓮科)

笹竜胆(ささりゅうたん)
(竜胆科)

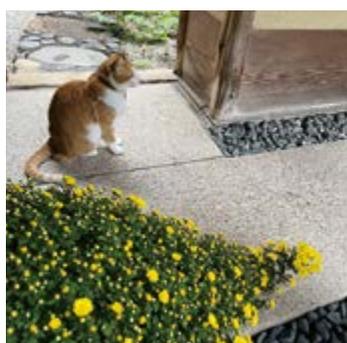
花器 黒釉鉢(くろゆうひつ)
(竹内眞三郎作)

あまり禅問答のような花をいけようとは思わないが、一輪の花を大切に作る気持ちは持っていたい。手にした花のどんな表情を見せたいのかによって、器を考え、取り合わせを工夫し、いける本数を決めるようにしている。

この屏風絵は表紙の屏風の裏側で、ここにはハスをと決めていた。枯れ行くハスの葉を一輪のリンドウが優しく見ている。

小菊とレモンちゃん

菊薫る季節(かき) 10/12撮影



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022年
11月号
No. 713

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





今年も届いた烏瓜

△表紙の花▽ 櫻子

花材 烏瓜の実(瓜科)

白花杜鹃草(百合科)

蓼(蓼科)

花器 煤竹手付籠

5年前からカラスウリをテキストに載せている。お弟子さんが庭で採ったものだ。過去に3作仙溪が付けて、今回は健一郎と私がつけた。それぞれに違う味わいがある。

私は赤と白の野草を合わせて籠花にした。煤竹の温かみのある色が良く似合っている。



烏瓜の花
7月撮影



秋草と色づく葉

△2頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け

花材 更科升麻(金鳳花科)

丁字草(夾竹桃科)

木苺(薔薇科)

花器 陶水盤



サラシナシヨウマの自然な曲
がりを生かして生花にかけた。
2種の葉色がいい景色になっ
てくれた。



実の色を集める

△3頁の花▽ 仙溪

花材 蔓梅擬(錦木科)

菊(菊科)

白花藤袴(菊科)

花器 陶水盤

ツルウメモドキの勢いを楽し
んでつけた。前方に実を集め
緑の濃淡で実の色を際立たせ
た。





徳島だより

毎年お盆の頃、華老の武田慶園先生とお弟子さん達は地域の文化サロン展に大作花をいけ続けておられ、今年で47回目となる。サロンを主宰する藤原茂喜さんは「文化力を高めるには作家が集い発表できる環境が重要」と。貴重な集いの場だ。

空色の器に

△5頁の花▽ 仙溪

花材 山茱萸の実さんしゅうぶ（水木科）

岡虎の尾おかとらのお（桜草科）

金水引きんすいひ（薔薇科）

花器 陶花器（木村盛伸作）

水が冷たく感じる季節。実が色づき、葉が秋色に染まっています。小さないけばなでいいので、移ろう季節の輝きを部屋にいて眺めていたい。





檀まゆみと菊の盛花

△6頁の花▽ 健一郎

花材 檀にしきぎ（錦木科）

菊4種（菊科）

竜胆りんどろ（竜胆科）

花器 陶水盤

菊ほど盛花が適しているお花があるだろうか。盛花だと菊の良いところを余す事なく味わうことができる。

糸菊のサラリとした葉も綺麗だが、一輪菊のようなハリと厚みのある葉も好きだ。盛花だと一輪菊の品を醸す葉が美しく見せられる。

立派な檀の葉の隙間から実が顔を覗かせる。



冬芽を楽しむ

△7頁の花▽ 健一郎

花型 生花 二種挿し

花材 水木（水木科）

菊（菊科）



花器 白竹竹筒

葉と花を落とした枝に花芽が付いている状態。冷たい色のバック紙を使用し、自分の感じている雰囲気になじむものは表すことができたと思っている。お花屋さんでは「まつ毛」と呼ばれていた菊。根締めには在ると安心する。



レモンの顔がキスだらけ：。夜中に野良猫と戦って、メイちゃんを守ってくれていたのかな。





蓮の枯葉 蓮台 ひめがま 姫蒲 しらん 紫蘭 ・
陶水盤



おみなえし 女郎花 しゅうかいどう 水引草 いぬたで 秋海棠 犬蓼
ほととぎす 白花杜鵑草 他 ・ 手付竹籠



黄糸菊 赤紫菊 赤小菊 白小菊
白万寿小菊 ・ 陶水盤



生花 まき 朝鮮槇 ・ 銅薄端



生花 やまにしきぎ 山錦木 ・ 陶鉢



まゆみ 檀 (黄葉と実) 黄菊 白菊 ・
陶水盤



立花 なつはげ 夏櫨 (紅葉) ななかまど 七竈 まゆみ 檀 つつじ 躑躅 りんどう 黄糸菊 竜胆
しやれぼく 晒木 ・ 銅花瓶



立花 つるうめもどき 蔓梅擬 ひいらぎ 柎 (緑葉と黄葉) りんどう 竜胆 ふじばかま 藤袴
白花藤袴 ・ 銅花瓶



西洋鎌柄 (黒い実) つつじ ほととぎす
 躑躅 杜鵑草
 ・ 陶花瓶



ばいかつつじ ざくろ やましやくやく
 梅花躑躅 石榴 (実) 山芍薬 (実)
 ・ 陶花瓶



すすき がまづみ
 薄 小葉の菟矢迷 (赤い実)
 白花野菊 ・ 陶水盤



ひおうぎ ふしぼかま ききょう
 檜扇 (花と実) 白花藤袴 桔梗
 ・ 陶水盤



のいぼら ぼら
 野茨 (赤い実) 雪柳 赤薔薇 ・
 陶花瓶



ひのき りんどう ふしぼかま
 檜 竜胆 藤袴 ・ 陶水盤



けいとう ひも ねずみもち
 立花 鶏頭2種 紐鶏頭 鼠薨
 べっこうまさき おうごんひば たけしやが
 龜甲柂木 黄金檜葉 竹著莪 ・
 銅広口花瓶



やぶさんざし
 生花 藪山査子 ・ 白竹竹筒



なつはげ しゅうめいぎく
 夏櫨 (紅葉) 秋明菊 赤小菊
 ・ 陶花瓶

直心立之内草之花形

花伝書を見る

立花 りつか 鶏頭直真 けいとうすくしん

直心立の内草の花形 すくしんたて

桑原正采

(富春軒仙溪・初版)

鶏頭 柳 梅擬 菊

擬宝珠 檉木 檜扇

躑躅 伊吹

(立花時勢粧・上)

うに目のある所に目あり、鼻ある所に鼻があるように」との古人の言葉を引用している。

型の中でどれだ

け草木の個性を引

き出せるかが問わ

れる花形である。

松以外を真(心)にした直真立花は「直真立・草の花形」になる。「直真立草の花形」というのは心に梅、海棠、梅擬、水木、檜、鶏頭などの直なるを用いる」と書かれている。

直真立ては法度を守り格式に背かず、草木きれいに素直なもの丈高く幽玄にさすことを本意とする。「人の顔のよ



同



烏瓜からすうり

△12頁の花▽ 健一郎

花材 烏瓜の実(瓜科)

楸からす(凌霄花科)

花器 陶花瓶

山に向かう道中や、あまりにも立派な烏瓜だと車を途中で止め見に行く。葉は乾燥に弱く、すぐに枯れてしまう。

私自身、花を生けるとときに園芸化された花も好きだが、できるだけまだ山の香りが残っている植物を相手にしている方が合っている気がする。その際に強い高揚感や植物と共にある感覚を強く感じる。自分でも不思議な気がしている。

家元稽古のお弟子さんから頂いたものを分けてもらった。絡からまりやすいはずの葉や蔓がとても綺麗にとられ、丁寧に包まれている。烏瓜も驚きだろう。もう一度絡めさすという奇妙な体験をすることができた。お花を生けることの妙な感覚が久しく思い起こされた。お気に入りのお楸からすに絡ませると、烏瓜を生かすことができた。先まで綺麗に包まれていた葉を味わいきった。花を生けることはその花を深く味わうことである。